埋蔵文化財公開活用事業

米原の城

―城のまちの戦国時代―

米原市教育委員会

2018.3

米原の城

―城のまちの戦国時代―

地頭山城から番場宿と鎌刃城を眺める

目　次

プロローグ　城のまち・まいばら……1
Ⅰ　米原市ゆかりの戦国武将……2
Ⅱ　城の歴史と種類……3
　ⅰ城の歴史……3
　ⅱ城の種類……4
Ⅲ　戦国時代の近江……5
　ⅰ近江の状況……5
　ⅱ滋賀県の城……6
Ⅳ　米原市の城……8
　ⅰ境目の城①……9
　ⅱ境目の城②……10
　ⅲ湖と道を抑える……12
　ⅳ大原氏と村落領主の城……15
　ⅴ京極家の城と館……16
　ⅵ城塞化された山寺……20
　ⅶ霊仙山中の山城……21
　ⅷ続日本100名城・鎌刃城……23
エピローグ　城を活かしたまちづくり……25
Ⅴ　資　料……26
　ⅰ縄張図の見方・虎口の構造……26
　ⅱ米原市内主要城館跡位置図……27
　ⅲ城の展示施設紹介……29
　ⅳ参考文献……30

米原市のようす

男鬼入谷城トレッキング
（平成29年）

米原市歴史キャラ「戦国くん」

プロローグ　城のまち・まいばら

山城（やまじろ）ブームが続いています。米原（まいばら）市内にも、地域の人も知らなかった、里山に眠る城跡（しろあと）を探訪する人たちが訪れます。城といえば姫路城や彦根城など、高い石垣の上にそびえる白亜の天守を一般には連想されます。いま、建物もなにもない山のなかに、戦国時代の土木工事で土を盛ったり、削ったりした削平地（曲輪（くるわ））や土塁（どるい）、堀などの防御施設の構造や築城技術を楽しむ愛好者が増えています。滋賀県内には、約1300ヵ所にのぼる中世城館跡（ちゅうせいじょうかんあと）が確認されています。その数は全国でもトップクラスで、近江は「城の国」なのです。そして、米原市域には約100ヵ所もの城館跡が確認されていて、米原市は「城のまち」といえそうです。さらに、地域の山城跡を活かした活動が盛んなのも米原市の自慢です。山城の主郭（しゅかく）（本丸）からは、500年前に戦国武将たちが見た景色が眺められます。山城は、戦国時代といまをつなぐタイムマシン。さあ、米原のお城を訪ねよう！

Ⅰ．米原市ゆかりの戦国武将

京極高次・京極高知

京極家は、近江の守護佐々木氏の庶流で、鎌倉時代から戦国時代中頃まで、米原市を拠点に北近江を支配します（Ⅳ－ｖ参照）。戦国後期、家臣浅井氏の台頭でいったん衰退します。しかし、関ヶ原の戦いで、高次（大津６万石）は前哨戦の大津籠城戦で西軍を釘付けにし、高知（信濃飯田12万石）は、東軍の主力として岐阜城攻略に武功をたて、本戦では東軍左翼第二陣で藤堂高虎隊とともに宇喜多・大谷勢を撃破しています。江戸時代、高次は若狭一国（小浜藩8万5000石）、高知は丹後一国（宮津藩12万3200石）の国持大名として並び立ち、京極家の復興を果たしました。

大津城復元図（提供：成安造形大学）

石田三成

永禄３年（1560）、近江国坂田郡石田村（長浜市石田町）に生まれました。観音寺（朝日）で小姓をしていたとき、鷹狩の帰りに立ち寄った羽柴秀吉に才を見出された「三献の茶」の伝承は有名です。豊臣政権の五奉行の一人として活躍し、秀吉の死後、徳川家康打倒のために決起しますが、関ヶ原の戦いで敗れ、京都六条河原で処刑されました。佐和山城（彦根市）主のとき、領内に出した掟書が成菩提院（柏原）や伊吹に残っており、領民としての義務と権利がきめ細かく記されています。

大原観音寺

大谷吉継

豊臣秀吉の家臣で、越前敦賀城主。西軍の参謀として関ヶ原の戦いで奮戦しますが、小早川秀秋らの離反で敗れました。下多良には「吉継の首塚」と伝えられる大型の一石五輪塔が、半間四方の祠に祀られています。『改訂近江国坂田郡志』には吉継の甥の僧祐玄が最後を見届け、菩提を弔うため各地を転々として、米原に葬ったのではないかと記しています。真偽のほどはわかりませんが、おそらくは智将吉継への判官びいきが生んだ伝説ではないでしょうか。いまも地元の人たちによって大切に祀られ、吉継ファンの人たちが全国から見学に来られます。

大谷吉継の首塚

新庄直頼

近江国新庄（米原市）の国人で、京極氏の古くからの被官今井氏から出た一族です。浅井氏の命により、湖上交通の要港朝妻湊に朝妻城を築きました。直頼は浅井氏に属したのち織田信長に降り、秀吉の馬廻りとなります。関ヶ原の戦いでは、やむをえず西軍に属して伊賀上野城を攻略し、戦後領地を失いますが、慶長９年（1604）に３万300石を与えられ、常陸国麻生（茨城県行方市麻生）に陣屋を構えます。関ヶ原で改易され、小禄とはいえ以前の石高以上で復活したのは新庄家だけです。これは、直頼と徳川家康との深い親交によるものといわれています。

麻生藩家老屋敷（茨城県行方市）

II. 城の歴史と種類

i　城の歴史

城は、「敵から自分たちを守るためにつくった建物や設備など」をいいます。時代によって変遷し、さらに北海道から沖縄まで日本中にあります。

■弥生時代(およそ2300～1700年前)

日本で最初に、守りを固めた集落(村)が登場するのは弥生時代です。高い山の上の防御性の高い集落や、吉野ヶ里遺跡(佐賀県)では溝や柵、土手をめぐらせた村が復元されています。

■奈良、平安時代(710～1185年)

都から遠く離れた東北地方などでは、政府に従わない勢力に対して、その地域の最前線に多賀城(宮城県)や秋田城などがつくられました。それらの城は、防御だけでなく、地方の役所としての役割も果たしました。

■鎌倉時代(1185～1333年)

鎌倉幕府が開かれ、貴族から武士の政治にかわった時代です。武士たちは、平地や小高い丘に、建物の周りに土塁や堀をめぐらせた居館をつくり、戦いに備えて日々訓練をおこなっていました。

■南北朝、室町時代(1336～1573年)

■南北朝時代(1336～1392年)

天皇や幕府が南朝と北朝に分裂していた不安定な時代でした。そのため多くの争いがおこり、全国的に城の数が急増します。この時代の城は、戦争がおこったときにたてこもりやすく、守りやすい、標高の高い場所につくられました。

太平寺跡(南北朝時代)

■室町時代(1338～1573年)

応仁文明の乱(1467～1477)以降、国内の政治は不安定で、多くの城がつくられました。米原市の山城の多くはこの時代のものです。土を盛り上げたり、山の尾根を削ったり、掘り下げたりする大規模な土木工事をおこない、木造の小屋のような建物があったと考えられます。

上平寺城跡主郭

■安土桃山時代(1573～1603年)

織田信長がつくった安土城から、城の中心部に「天守」をもつ城がつくられはじめました。不便な山の上にある城から、交通の便のよい平地や台地に大きな城をつくり政治をおこなうことが多くなりました。水堀や高い石垣、瓦でふいた立派な建物をつくる時代がはじまりました。

■江戸時代(1603～1868年)

江戸時代になると、ひとつの藩(国)にひとつの城しかもってはいけないという「一国一城令」という命令が江戸幕府から出されました。これにより多くの城が使われなくなりました。

鎌刃城大櫓復元図

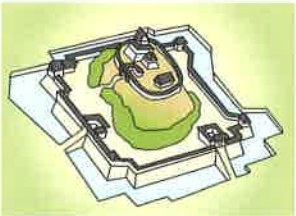
©復元考証：山田岳晴　CG制作：松野有記　提供：株式会社碧水社

ii　城の種類

城はつくられた場所によって「山城（やまじろ）」（山につくられた城）、「平山城（ひらやまじろ）」（台地や小高い丘につくられた城）、「平城（ひらじろ）」（平地につくられた城）に分けられます。

山城イメージ

鎌刃城跡大堀切



平山城イメージ

平城イメージ

城に使われる用語

【曲輪（くるわ）（郭）】
自然地形を平らにならした城郭を構成する平坦地。中心となる曲輪を「主郭（じょうかく）」よびます。

【帯曲輪（おびくるわ）】
大きな曲輪などのまわりを細長く囲んだ曲輪。

【土塁】
土を盛り上げてつくった土手のこと。敵の攻撃や侵入を防いだり、目かくしの役割もしました。

【石垣】
石を積み上げてつくった壁のことで、重い建物を支える土台の役割もしていました。

【堀】
敵の攻撃を防ぐために曲輪のまわりなどに掘られた溝。平城では、水をためた「水堀」が多く、山城では、水のない「空堀」が多く見られます。

【堀切（ほりきり）】
空堀のうち、山の尾根を断ち切るように掘られたもの。

【竪堀（たてぼり）】
山の斜面に沿って、竪に掘られた溝。

【横堀】
曲輪の外側に沿って掘られた溝。

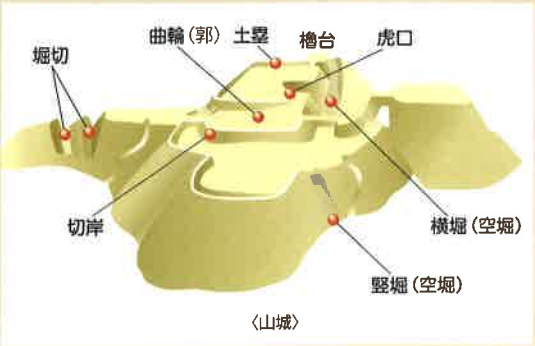
上平寺城跡枡形虎口

【虎口（こぐち）】
城の出入口。枡形（ますがた）や喰い違いなど防御の工夫が見られます（Ⅴ－ⅰ参照）。

【切岸（きりぎし）】
人工的に急な斜面をつくり、人が登りにくくしたもの。

【櫓台（やぐらだい）】
曲輪のなかで一段高く盛り上がったところ、見張台。

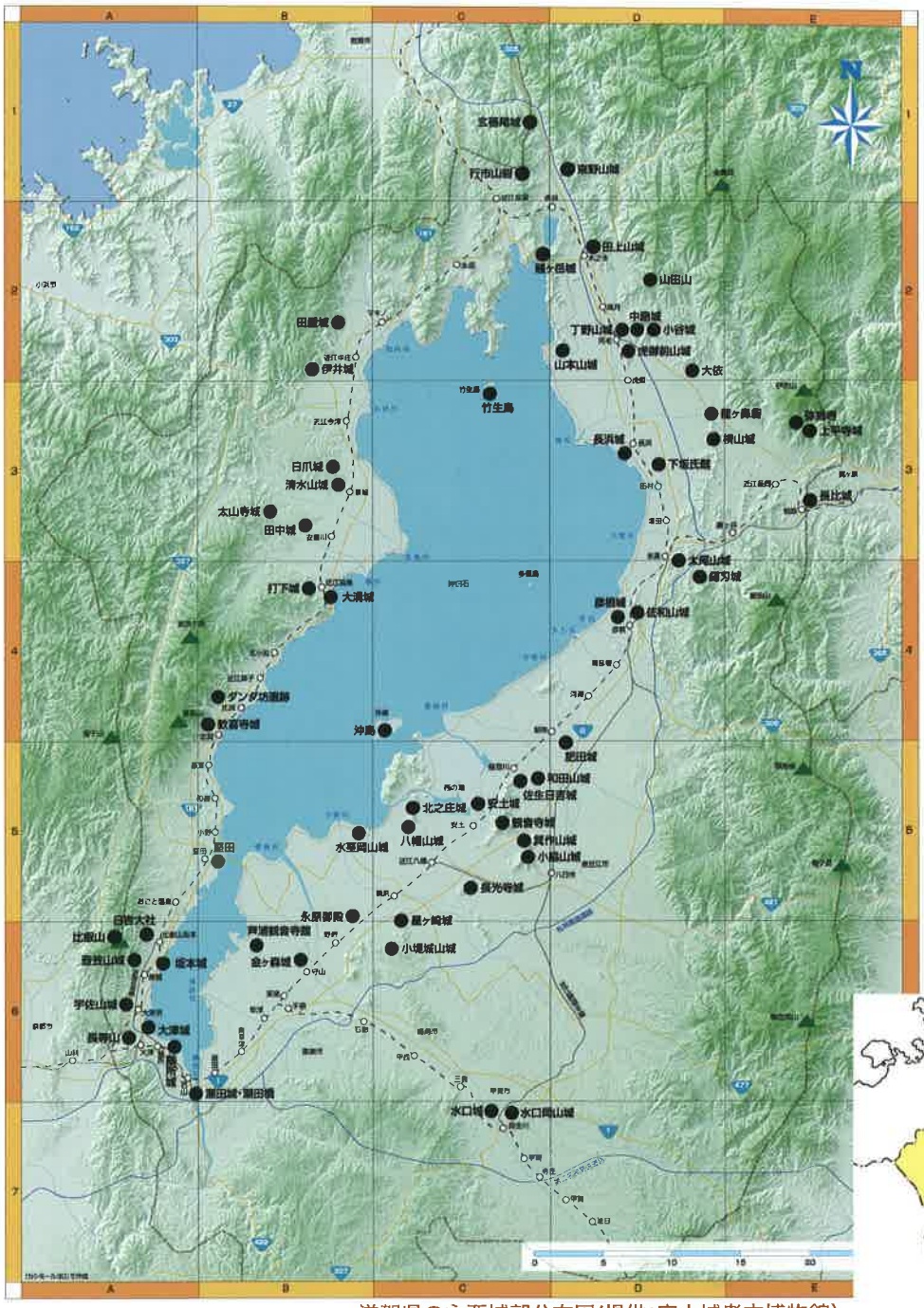
中世山城の遺構



弥高寺跡を山城に模倣

全貌がわかる山岳寺院遺構を中世山城に模してみました（撮影：髙木浩二）

※３・４ページの内容や図版は、魚津市教育委員会2012『自慢のお城　松倉城とその支城群』を参考にしました。



滋賀県の主要城郭分布図(提供:安土城考古博物館)

日本100名城
小谷城 (長浜市)
彦根城 (彦根市)
安土城 (近江八幡市・東近江市)
観音寺城 (近江八幡市・東近江市)

続日本100名城
玄蕃尾城 (長浜市・敦賀市)
鎌刃城 (米原市)
八幡山城 (近江八幡市)

III. 戦国時代の近江

i 近江の状況

近江の国の戦国史は、六角(ろっかく)氏と京極氏、そして浅井氏との抗争が大きな軸となりました。六角氏(近江守護佐々木氏惣領(そうりょうけ)家)は近江守護として湖南から湖東に勢力を持ったのに対し、湖北の坂田・浅井・伊香(いか)郡では同じ佐々木一族の京極氏(庶子(しょし)家)が軍事指揮権を行使しました。京極氏は、大永(だいえい)3年(1523)、家督相続問題をきっかけとした家臣団のクーデターで弱体化します。そのなかから国人の浅井亮政(すけまさ)が頭角を現し、京極氏を推戴して小谷城(おだにじょう)(長浜市)を構えました。この状況をみて六角氏が北近江に進攻し、たびたび米原周辺は戦場となりました。その後、浅井長政は、織田家と婚姻関係を結びますが、元亀(げんき)元年(1570)、織田信長を見限り、姉川合戦で朝倉(あさくら)勢とともに戦います。一時は京都方面まで制圧しますが、天正元年(1573)、小谷城陥落により滅亡します。

ii　滋賀県の城

日本全国には５万の城跡があるといわれています。そのなかで滋賀県の約1,300ヵ所は全国６番目、分布密度は3.44㎢当り１城（琵琶湖を除くと2.86㎢に１城）と全国1位。国の史跡に指定されている件数は全国４番目(北海道・沖縄を除くと２番目)で、特別史跡の城郭が複数あるのは滋賀県だけ。城の数・質とも全国トップレベルなのです。

滋賀県の史跡城館跡

特別史跡

■安土城跡(近江八幡市・東近江市)

天正10年(1582)、天下布武の拠点として織田信長が築いた総石垣の織豊系城郭の出発点といわれる城です。ごく一部を除き四方を湖に囲まれた天然の要害でした。

安土城跡

■彦根城跡(彦根市)

関ヶ原合戦の功績で彦根に入った井伊氏の居城で、西国の抑えとして12大名による天下普請で築かれ、天守は大津城、天秤櫓は長浜城から移築されたといわれています。

彦根城跡

平地の城

■北近江城館群(下坂氏館跡・三田村氏館跡)(長浜市)

湖北地方の農民層はその生産力の高さから在地領主に匹敵した力を秘めていたといわれ、領主も集落内に居館を構え、生産力を背景に強い自立性を持ちました。下坂氏館は菩提寺を伴う屋敷跡が、三田村氏館は高く厚い土塁が良好にのこっています。

三田村氏館跡(提供:長浜市)

■芦浦観音寺跡(草津市)

織田信長から琵琶湖水運権が任せられ、秀吉のもとで伏見城の作事奉行などを務めるなど、４万石の領地を与えられました。城郭のような表門と内堀がのこります。

芦浦観音寺跡

なぜ、滋賀県に城が多いのか

気候温暖で肥沃な近江の生産力は、古代から中央政権の生命線でした。高い生産力と情報・物流の要である近江は、政権確保のためには手中に治めなくてはならない国として、激しい争奪の場となりました。さらに、近江は主要街道が集中します。都の玄関口であり、東国の人や物資を運ぶ東海道と東山道（江戸時代の中山道）は草津で合流しました。日本海を結ぶ若狭街道・西近江路、北陸を結ぶ北国街道、北陸と東海を結ぶ北国脇往還のほか、琵琶湖を利用した水上交通も重要です。信長・秀吉・家康。戦国時代の政権の担い手は東海の武将です。京にのぼるため必ず手に入れなければならないのが近江。近江を攻め、そして近江の地と人を守るためにたくさんの城が築かれました。

山　城

■玄蕃尾城跡（長浜市・福井県敦賀市）

本能寺の変後、北近江も所領とした北之庄城（福井市）主柴田勝家が、中間の近江と越前の国境に築きました。曲輪を連ね、直線的かつ複雑に折り曲げる畳線が見どころです。

玄蕃尾城跡概要図（作図：高田　徹）

■小谷城跡（長浜市）

日本五大山城の浅井氏の居城です。南北に延びる尾根上に曲輪を連ね、斜面には魚の鱗状の小さな曲輪や、幾重もの長い竪堀で防御性を高めています。眼下の清水谷が城下です。

■観音寺城跡（近江八幡市・東近江市）

近江守護六角氏の居城で、日本五大山城のひとつです。山頂付近の本丸を要として扇状にたくさんの曲輪が配置されています。石垣、石塁などに近江の先進性を見ることができます。

■清水山城跡（高島市）

六角氏・京極氏の同族で、高島郡中南部で勢力を広げた「高島七頭（西佐々木一族）」の惣領家越中氏の居城です。主郭では大規模な礎石建物が見つかり、三方の尾根に曲輪を配置します。

小谷城跡概要図

■甲賀郡中惣遺跡群
（新宮城・新宮支城、寺前城・村雨城、竹中城）（甲賀市）

甲賀郡は在地小領主が割拠し、「甲賀衆」として連合し、合議によって意思決定をおこなう「甲賀郡中惣」体制を確立させました。地域には小領主たちの方形単郭型の小規模城館が密集しています。

新宮支城跡

観音寺城跡概要図（滋賀県教育委員会）

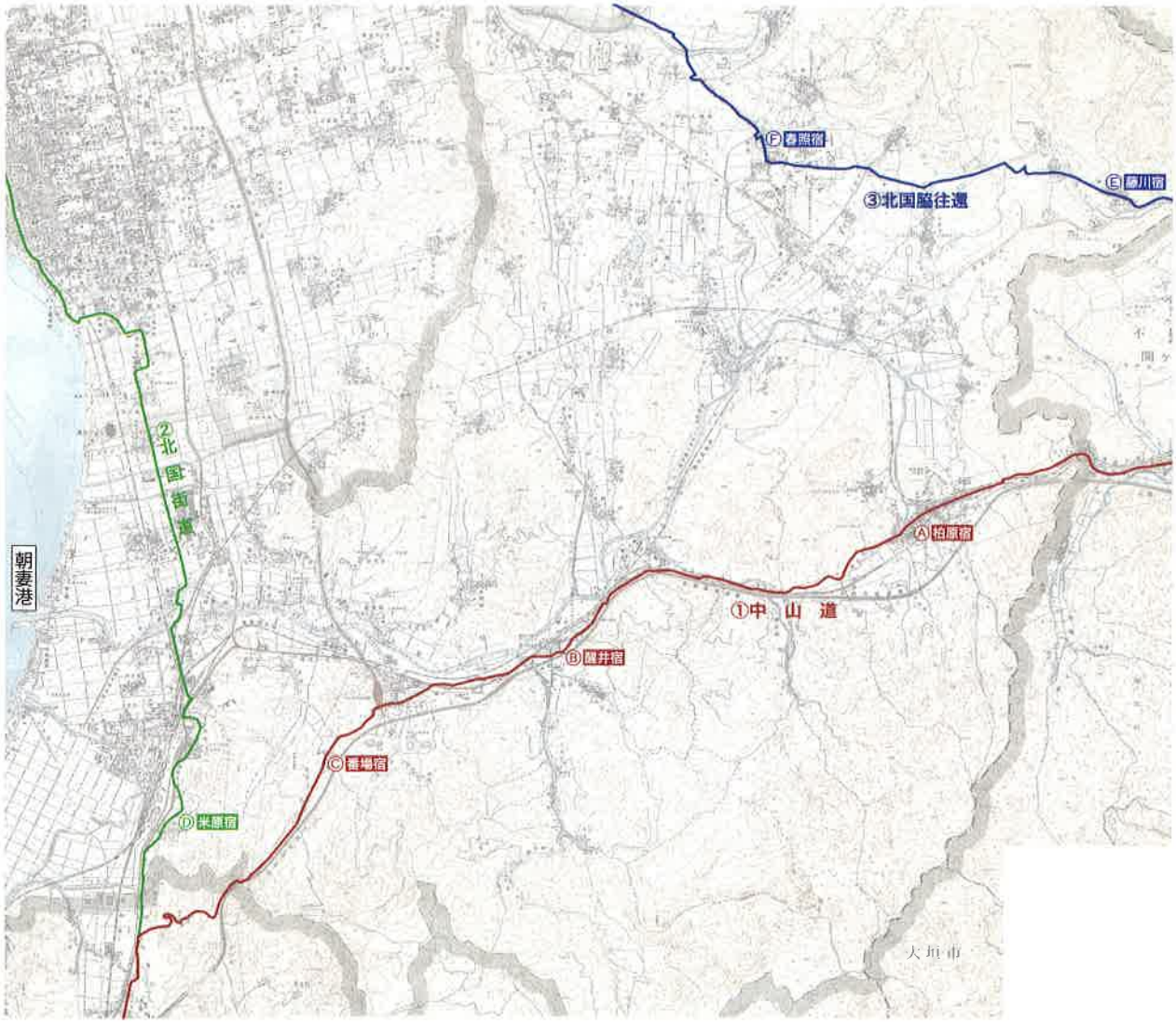
新宮城・新宮支城跡概要図（作図：中井　均）

清水山城跡概要図

※米原市の国史跡「京極氏遺跡」（Ⅳ－ｖ）および国史跡「鎌刃城」（Ⅳ－viii）については別に紹介しています。

Ⅳ．米原市の城

米原市は、近畿地方の北東端にあります。縄文時代から東からの文化が流入する玄関口にあたり、都の文化は米原から東国に伝播しました。滋賀県の縮図のように、東山道などの古代からの主要道が畿内と東海・北陸を結び、江戸時代には中山道・北国街道・北国脇往還が整備され、６つの宿場が置かれました。さらに、朝妻湊は奈良時代から中世にかけての琵琶湖の重要な港で、東からの人や物資は、ここから船で大津へ、そして都へと運ばれました。米原の城はバラエティーに富んでいます。その特徴をあげると、ⅰⅱ境目の城：南近江の六角氏や、元亀元年(1570)、信長の侵攻に備えて築かれました。ⅲ湖と道を抑える城：交通網が集中する米原らしい城郭です。ⅳ村落領主の城：とくに近江地域の平野部に分布します。ⅴ京極氏の城館：守護大名の在り方がわかります。ⅵ城塞化した山寺：弥高寺跡が典型的な事例です。ⅶ霊仙山中の山城：山中の大規模城郭が特徴です。そして、ⅷ「続日本100名城」鎌刃城があるのも米原市です。



近世米原の街道と宿場

①中　山　道
②北 国 街 道
③北国脇往還

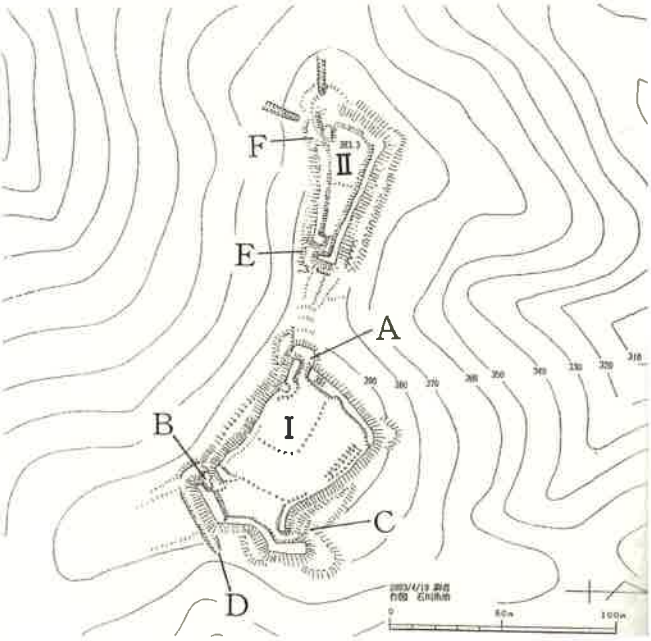
Ⓐ柏　原　宿
Ⓑ醒　井　宿
Ⓒ番　場　宿
Ⓓ米　原　宿
Ⓔ藤　川　宿
Ⓕ春　照　宿

i　境目の城①　―近江・美濃国境―

元亀元年(1570)、織田信長を見限った浅井長政は、信長の侵攻に備え、近江と美濃の国境で、中山道を封鎖する長比城と北国脇往還を押える苅安城(上平寺城)を築城します。分厚く高い土塁や竪堀の多用は、越前朝倉氏の関与が認められます。長比城は竹中半兵衛に調略され、信長はここに入り、近江への侵攻が始まります。

長比城跡から中山道柏原を望む

長比城(野瀬山城)(柏原・長久寺、岐阜県関ヶ原町)　標高400m



長比城跡概要図(作図:石川浩治)

伊吹山から派生する滋賀県と岐阜県にまたがる野瀬山の山頂に位置しています。信長の近江侵攻に対して、浅井・朝倉軍は、美濃の国境に防御ラインを設けます。『信長公記』には、「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらへ・かりやす両所に要害を構え候」とあり、越前朝倉氏の力を借りて、長比城・苅安城(上平寺城)を築城したのです。しかし、守備していた堀秀村・樋口直房は信長軍に内応し、両城はあっけなく開城しました。長比城の遺構は、大きく東と西の曲輪から成り立っています。西側の曲輪は、東西約50m、南北最長で約30mで、ぶ厚く高い土塁がめぐり、東側に喰い違いの虎口を設け防御しています。東の曲輪は、西の曲輪よりひと回り大きく、東側の土塁はぶ厚く高いものです。東側と北側に喰い違いの虎口を設けており、東側(美濃側)を意識した構造になっています。

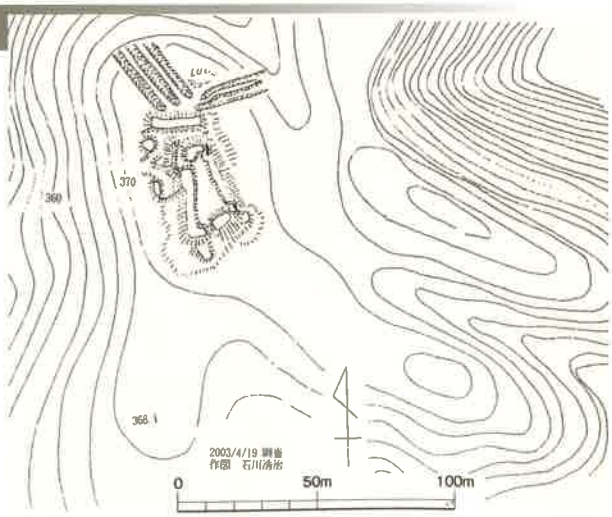
長比城跡西曲輪

長比城跡東曲輪

須川山砦畝状竪堀群

須川山砦(須川、岐阜県関ヶ原町)　標高351m

比較的小規模ですが、高い土塁をめぐらせて、コンパクトにまとまった縄張りを見せます。北側の虎口は細い土塁を突き出して外枡形状となり、虎口の外に土塁を設け、完全な遮断線としています。その外にさらに補助の遮断線として、北方の斜面に3本からなる畝状竪堀群を、東には2本の竪堀を落としています。また、南側の虎口には、目隠しの状の張り出しが東西にあり、出撃用の虎口とみられます。南に近接する長比城と占地や遺構に類似したプランが見られることから、両城の中間の尾根鞍部を兵の駐屯地と考えると、1つの城塞群として評価することができます。



須川山砦跡概要図(作図:石川浩治)

※江濃国境の城として、上平寺城(苅安城／Ⅳ－ｖで紹介)、八講師城(Ⅳ－viで紹介)、大峰山城、高屋城などがあります。

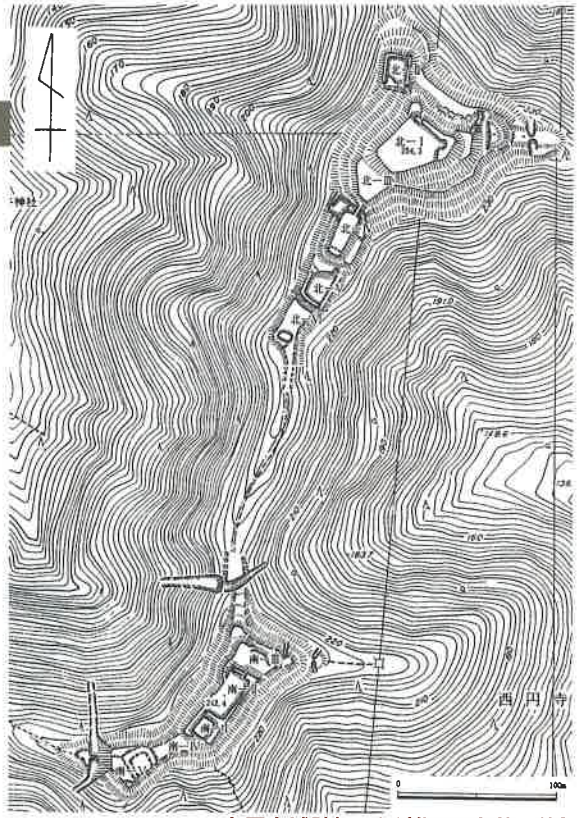
ii　境目の城②　　―南北近江の境―

米原市南部は、坂田郡と犬上郡の郡境にあたり、北近江の京極・浅井氏と南近江の六角氏が対立し、互いに侵攻を繰り返しました。城主はめまぐるしく入れ替わり、常に緊張状態にあったことから、当時の最先端の技術が投入されたことが発掘調査で明らかになりました。境目に築かれた諸城は、軍学にいう「別城一郭」といわれる北城と南城というふたつの城郭からなる形態が集中し注目されます。

米原市指定史跡

太尾山城（米原・西円寺）　標高254m

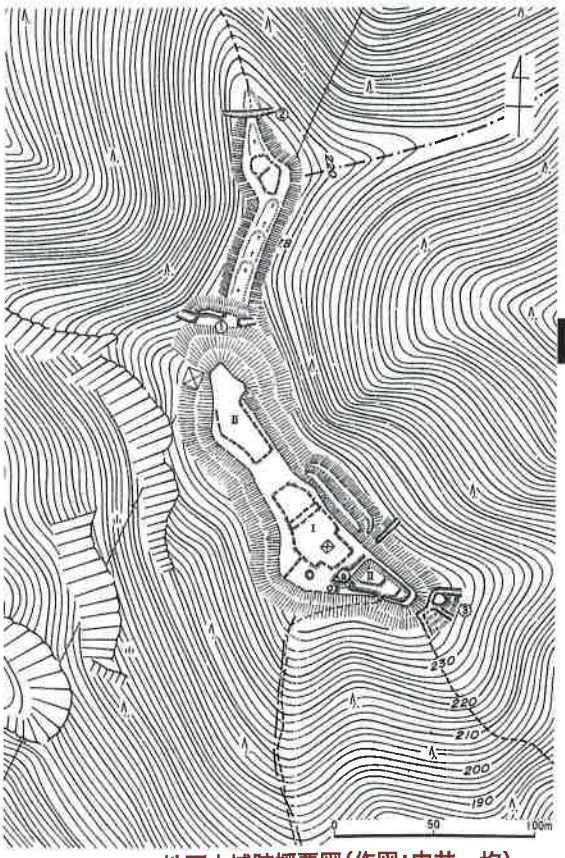
JR米原駅の東にそびえる太尾山山頂にあります。築城年代は不明で、在地土豪の米原氏が築いたといわれています。文明３年(1471)、美濃の守護代斎藤妙椿が侵攻し、米原山で合戦があったとの記録があり、太尾山と考えられています。天文７年(1538)、六角定頼の北近江侵攻では、永田氏などが布陣しています。天文21年(1552)、京極高広が六角方の太尾山城の攻略を今井氏に命じますが失敗。永禄４年(1561)、浅井長政が攻略して中嶋宗左衛門尉を入れます。元亀２年(1571)、織田信長により浅井方の佐和山城が開城すると、宗左衛門尉も太尾山城を退き、以後廃城になりました。発掘調査では、櫓や御殿的居住施設、倉庫的施設と考えられる礎石建物が見つかりました。また、儀礼に用いられた土師皿や灯明皿が出土し、小谷城や鎌刃城同様に山上に生活空間があったことが明らかになりました。



太尾山城跡概要図（作図：中井　均）

中山道番場宿の北を迎える地頭山城跡

太尾山城跡出土礎石建物



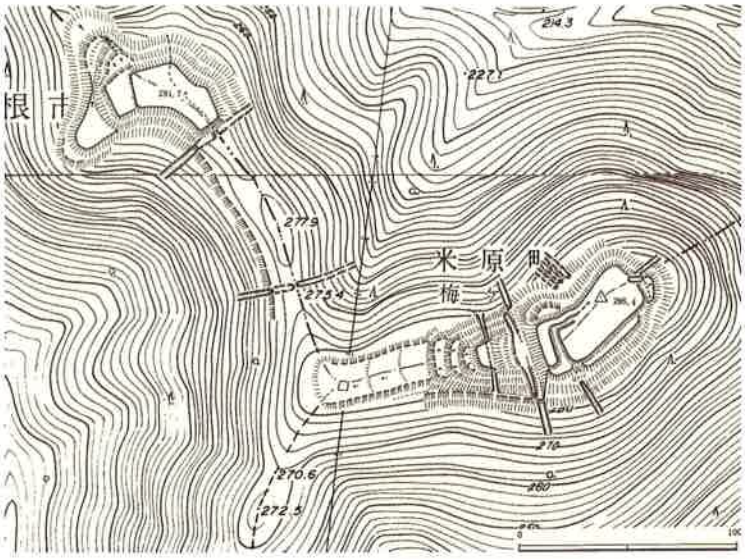
地頭山城跡概要図（作図：中井　均）

地頭山城（南三吉・寺倉）　標高249.1m

番場集落の北の地頭山山頂にあります。「天文廿二年候や、地頭山被責落候年の御事候」（「保内商人申状案」（『今堀日吉神社文書』））の記述があり、天文21年(1552)、六角義賢が、浅井方の鎌刃城と菖蒲嶽城を落とし、翌年に地頭山城を攻めたことを記していると考えられます。『嶋記録』では、浅井長政方の今井一族が守備しています。東に東山道を直下に見下ろし、西は、番場から箕浦へ北上し、小谷城下で北国脇往還と合流する中世北国街道（小谷道）の分岐点の要地に、街道監視の城として築城されたと考えられます。曲輪の削平は不明瞭ですが、要所に櫓台を伴う土塁や堀切が設けられています。

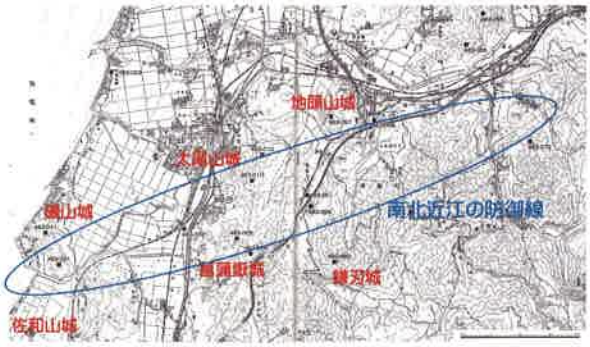
菖蒲嶽城（番場・梅ヶ原、彦根市）　295.4m（南城）

京極家根本被官筆頭の今井秀俊が六角氏に内通したことで、天文２年（1533）切腹を命じられ、その子尺夜叉丸は六角氏の観音寺城に逃れます。成人した尺夜叉丸（定清）は、旧領復帰の願いから、南北近江境に菖蒲嶽城を築き、六角氏北進の拠点にしました。天文13年には、浅井方の堀氏が籠もる鎌刃城に対して進路を封鎖する目的であることが『嶋記録』に記されています。さらに、太尾山城将も務めた六角氏北進の前線指揮官・吉田安芸守も在城しています。その後、定清は浅井方となり箕浦館にもどり、菖蒲嶽城は廃城になったと考えられます。彦根市境に位置する「別城一郭」タイプの山城で、北城は主郭と副郭のみの簡単で小規模な構造で、南城も西側と南側に土塁をめぐらせた主郭のみの小規模なものですが、内枡形構造の虎口、竪堀や堀切を配す発達した構造を示します。



菖蒲嶽城跡概要図（作図：中井　均）

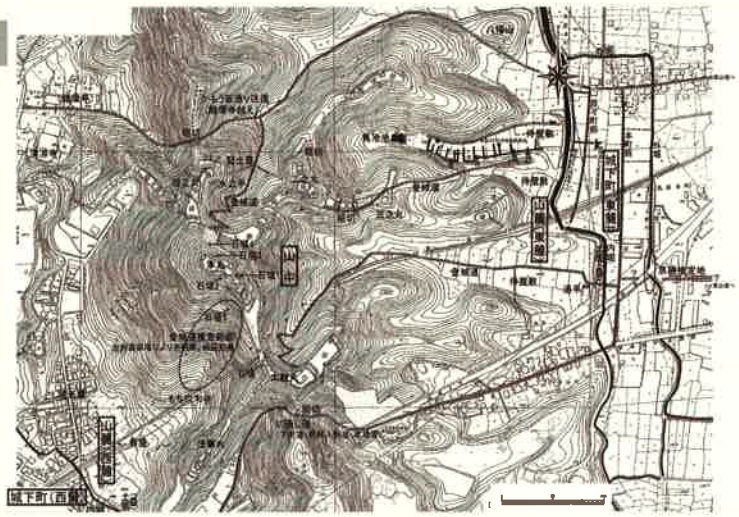
菖蒲嶽城跡から名神高速を望む



南北近江の境目の城群

佐和山城（彦根市）　標高233m

大手側から佐和山城跡を望む


佐和山城と城下の発掘調査成果（作図：下高大輔）

佐和山城はもと坂田郡鳥居本村に属しました。佐和山の西麓には琵琶湖の松原内湖が迫り、東麓には東山道（のちの中山道）と北国街道が通る、主要陸路と湖上水運とをつなぐ交通の要衝です。「三成に過ぎたる城」と謡われ、石田三成の城のイメージが強いのですが、その立地から、南北近江の境目として常に争奪の的となりました。元亀元年（1570）の信長の近江侵攻では、浅井方の磯野員昌が「三里四方に砦を築き」という攻めに八ヶ月の長期の籠城戦を展開しました。豊臣政権下、三成が城主になると「佐和山惣構」の普請がおこなわれ、石垣の上には五重の天守が建てられました。山頂の本丸を中心に各尾根に法華丸、太鼓丸、二の丸、三の丸、西の丸、塩硝櫓が築かれ、それぞれが堀切により遮断されています。

※このほか、南北近江境の城として、磯山城（Ⅳ－ⅲで紹介）、鎌刃城（Ⅳ－ⅷで紹介）、物生山城・キドラ谷砦（彦根市）などがあります。

iii　湖と道を抑える

上方と東国、その両方と北陸の結節点の米原。古代から琵琶湖は、大陸や日本海側の人や物資を運ぶ大動脈です。米原市には、湖上水運を抑え、経済的支配のための湖岸の城や、中世東山道と北陸道などの街道が交差することから、街道を監視し、敵の動きを抑止する城が築かれました。

湖の城

■磯山城（磯）　標高159m

かつての入江内湖（左奥が磯山城跡）

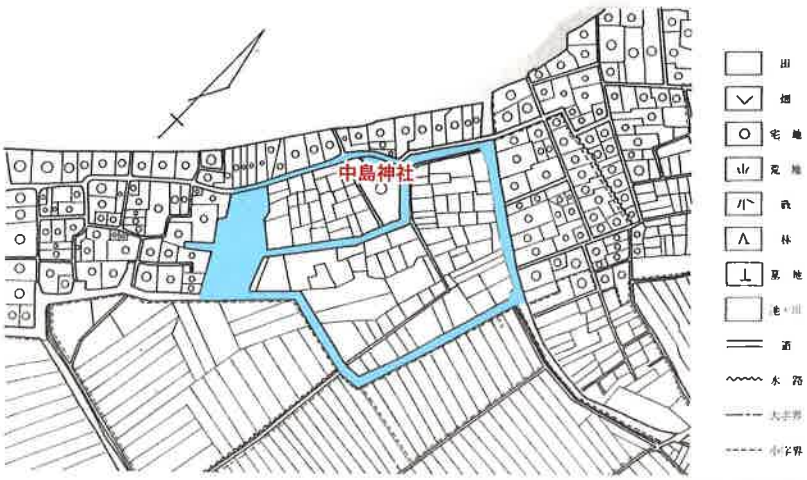
かつて磯山は、南北を松原内湖と入江内湖にはさまれて琵琶湖に突出した半島状の山でした。この地は、湖上交通と浜街道を抑える要衝の地です。当初は松原（彦根市）を本拠とする松原氏の居城とされます。大永年間頃（1521）、浅井亮政が磯山城の普請をおこなっています。天文７年（1538）には、佐和山城を落した六角定頼が、北近江侵攻に際し磯山を陣所としました。さらに、浅井家家臣の磯野員昌が、永禄４年（1561）佐和山城へ入る前に、磯山城にいたことが記録にみえます。元亀２年（1571）、信長の佐和山城攻めでは、織田方の陣城として用いられたようです。磯山の北側のピークは「トラカシロ（虎ヶ城）」とよばれ、南端のピークにも数段の削平地がある別城一郭タイプの構造です。しかし、曲輪間を遮断する堀切や土塁などの構築物はみられません。

磯山城跡概要図（作図：中井　均）

■朝妻城（朝妻筑摩）　標高86m

朝妻城跡　撮影：高木浩二
（中央中島神社、堀だった道がめぐる）

天野川河口の朝妻湊は、琵琶湖東岸の東山道と北陸道の接点に位置し、琵琶湖の港のなかでも、『延喜式』（927）に塩津湊（長浜市）、海津湊・勝野湊（高島市）とともに公認港として記載されている要港です。浅井氏がここを支配するために、新庄直昌が築城しました。新庄氏は坂田郡新庄（米原市）の国人で、その子直頼は、のちに信長に降り、秀吉の馬廻りとなって、天正11年（1583）、摂津国山崎城に移封となり、朝妻城は廃城となりました。中島神社一帯を地元では「殿屋敷」とよび、「朝妻筑摩村地券取調縮図」には、ここをめぐる水濠が認められ、南面には幅の広い水濠が描かれていて、城に付属する船溜りの痕跡と考えられます。



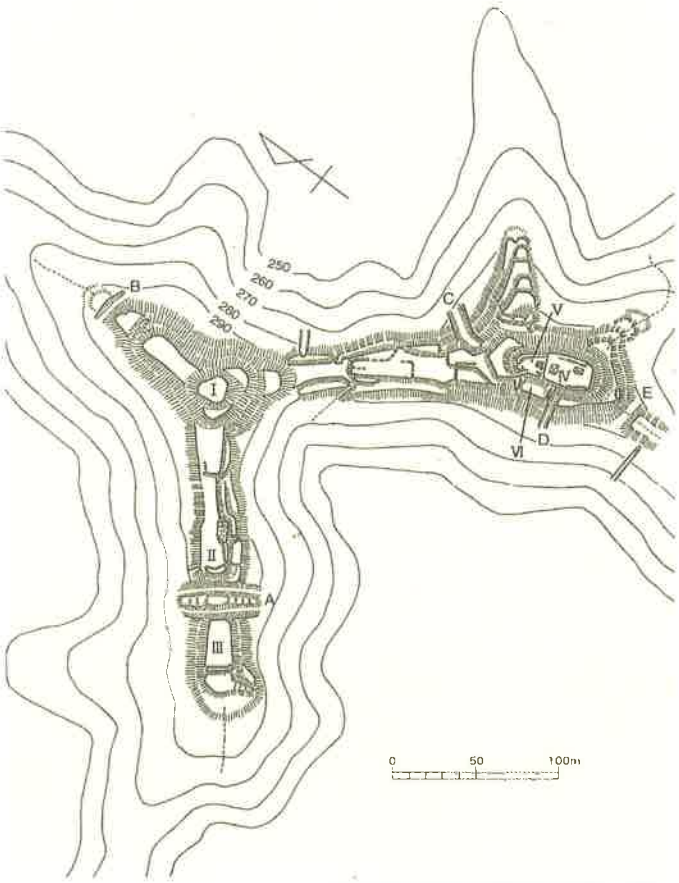
「朝妻筑摩村地券取調縮図」（部分）

街道の城

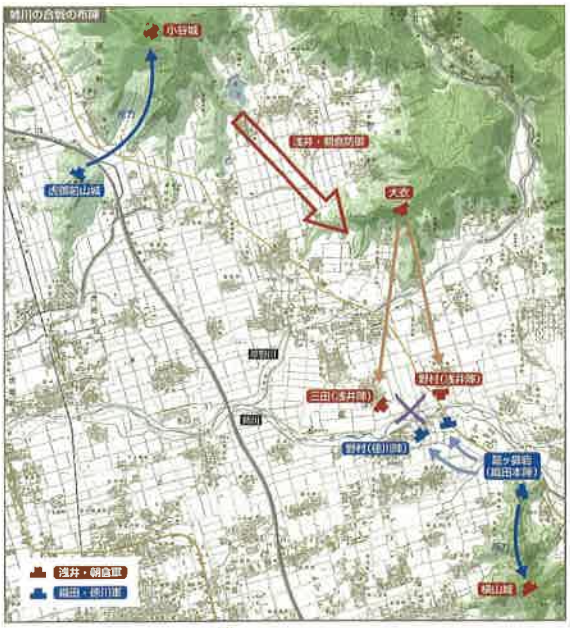
■横山城（村居田・烏脇・朝日、長浜市）　標高312m

米原市と長浜市の境をなす横山丘陵の最高峰を中心とする頂上部一帯に築かれ、東は伊吹山や北国脇往還、西は長浜の平野部から琵琶湖を眺め、北は小谷城や虎御前山を一望でき、北近江の抑えとして絶好の位置にあることがわかります。浅井氏の勢力拡大のための南進拠点として、永禄４年(1561)、長政によって本格的に改修されたようです。元亀元年(1570)、姉川合戦で織田軍が勝利すると、羽柴秀吉・池田輝政・柴田勝家らが横山城を攻撃して、守将大野木土佐守は開城し逃亡。信長は秀吉らを城番として、小谷城が落城する天正元年(1573)まで北近江の拠点としての役割を担います。城の遺構は、丘陵最高地から三方の尾根上に展開しています。最高地点を北城、そこから派生する南尾根上に南城が築かれた「別城一郭」の構造です。北城が単調な構造なのに対し、南城は、主郭の周囲の土塁や虎口、竪土塁、竪堀などを設けるなど、発達した構造になっています。天正11年(1583)、賤ヶ岳合戦に際して、秀吉は最前線や第二次前線に多くの城塞を築きますが、これらが突破されたときの備えとして横山城が改修されたようで、現存する遺構はこのときの改修の可能性が考えられます。

南城から伊吹山を望む



横山城跡概要図（作図：中井　均）



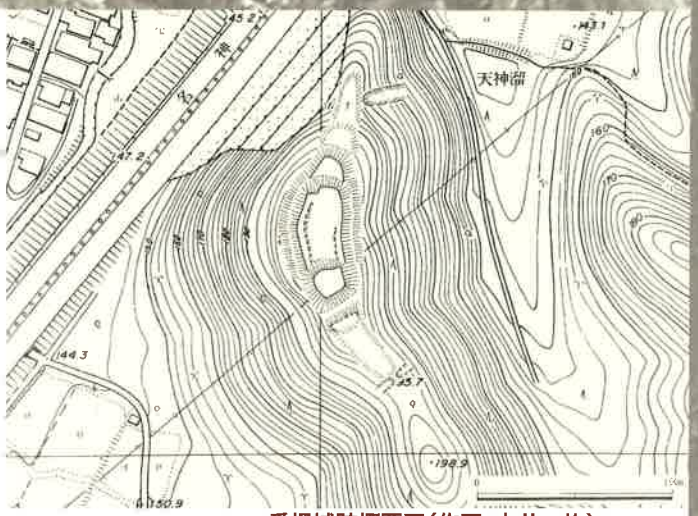
姉川の合戦布陣図（奥びわ湖観光連盟）

◇コラム　古墳と城

横山丘陵の北端は、姉川が北近江の平野に流れ込む場所で、水利の支配者である地域の首長が眠る北近江最古の前方後円墳「茶臼山古墳」（県史跡）のほか、多くの古墳が丘陵上に点在しています。姉川合戦のおりに信長が陣取った「龍ヶ鼻砦」をはじめ、古墳が砦として利用されています。また、横山城の南東山麓には、伊吹山四護国寺のひとつ「観音寺」があり、秀吉と石田三成の出会いの場として知られています。

茶臼山古墳

■番場城（番場）　標高200m



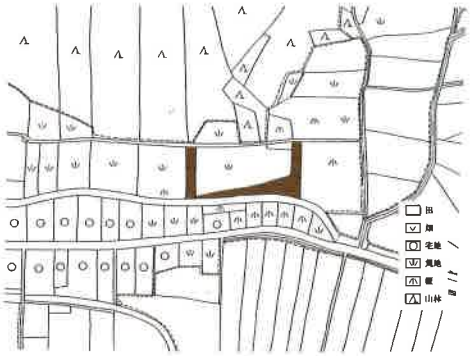
番場城跡概要図（作図：中井　均）

『近江国坂田郡郷士在名牒』（『江龍家文書』）に「番場城主　土肥左京進尊朝　同三郎　樋口三良左衛門　多羅左近」「鎌刃城主　堀遠江守　同二郎」とあり、番場城主として土肥氏の名が見えます。この文書では番場城と鎌刃城を区別していますが、他の地誌類では混同して鎌刃城主を土肥氏と記し、近代以降も坂田郡志などに引き継がれています。ただし、土肥氏の居館である殿屋敷遺跡を指している可能性も考えられます。

番場城は、殿屋敷遺跡の南方約100mの天神山にある小規模な山城です。尾根筋を堀切で切断して二段の曲輪を設け、主郭南端の堀切に接する部分には一段高く櫓台が構築されています。規模や立地から、室町時代、とくに応仁文明の乱のころに土肥氏によって築かれた殿屋敷の詰城と考えられます。土肥氏は戦国時代に没落します。

「番場村地券取調総絵図」（部分）

■殿屋敷遺跡（番場）



西番場の南東端、最も奥まったところにあります。西番場は元番場とよばれ、中世以前の箕浦荘の中心地でした。「番場村地券取調総絵図」（明治６年）の小字「殿屋敷」には方形に区画された一画が描かれ、東側の山を背にして前三方を細長い地割がめぐっており、これが土塁の痕跡を示しています。中世東山道は東側山麓直下を通っていたともいわれ、殿屋敷遺跡に隣接して幹線道路が通っていました。殿屋敷の北側約100mの地点で発掘調査がおこなわれ中世の遺構が確認されました。

■箕浦城（箕浦・新庄）

箕浦城跡概要図

大規模に構えられた平地居館で、天野川北岸に井戸村屋敷、奥屋敷、新庄城が横一列に並んで構えられていました。今井氏は、京極氏の古くからの家臣で、大字新庄内にある小字「殿城」とその南に隣接する小字「的場」付近に居館を構えていたようです。現在も水田の中に方形の微高地が残り今井氏の居館跡とされます。通称「奥屋敷」は、ここが井戸村氏の屋敷と伝えられ、井戸村文書のなかに箕浦庄内に八日市場のあったことが記されています。箕浦は交通の要衝で、東山道番場宿から箕浦、宮川・国友（長浜）を経て小谷城下に至る「小谷道」は、中世の北国街道でした。八日市場には商人が集まり、集落中心の三叉路は、小谷道と朝妻街道の分岐点で、朝妻湊を利用する人や物資が多く通った交通の要衝です。

◇コラム　今井一族

今井氏の菩提寺は西圓寺です。西円寺集落の水田中に天保３年（1832）に建立された今井肥前守塚があります。肥前守秀俊は、天文２年（1533）、京極氏の意を汲む浅井亮政により、六角氏に内応したことを責められ神照寺（長浜市）で自刃しました。子の定清は、永禄４年（1561）に太尾山城奪回戦で味方に誤って討たれました。山腹には嫡子今井秀形の墓があり「天正十二年（1584）」と刻まれています。秀形は秀吉に仕え、前年に伊勢嶺城で戦死し、今井の嫡流は途絶えました。

今井一族の墓

※このほか、街道を監視する城として、一の城〔顔戸山砦〕（顔戸）などがあります。

iv　大原氏と村落領主の城

京極氏や六角氏と同族で、大原荘（米原市北西部）を治めた大原氏の居館跡には、堀や土塁がのこされていますが、市内の多くの平地居館は、村の領主の居館として築かれた小規模で単純な構造の村の城です。後世に土塁が切り崩され、堀は埋められて城の形状を失ってしまいますが、地名や絵図、伝承から確認することができます。

大原氏館跡

大原氏館跡概要図

大原氏館（本市場）

鎌倉時代に近江守護佐々木氏が四家に分かれたとき、大原荘を与えられた重綱（しげつな）を祖とする大原氏の居館です。大原荘の地頭として、鎌倉時代には幕府御家人（ごけにん）、室町時代には奉公衆（ほうこうしゅう）（将軍直属の軍隊）に列して、大原荘の経済力を背景に鎌倉や京都で活躍した一族ですが、戦国時代になるとしだいに六角氏の家臣に組み込まれ、運命を共にしたようです。現在、植林地や竹林のなかにL字型の立派な土塁と堀がのこされています。大原氏は、姉川から取水する用水「出雲井（いずもゆ）」を整備して、大原荘一帯を潤すことで地域支配の要とします。主要村落に一族を配置して用水を分配し、小田城（竹腰氏館）（やないだじょう たけごし しやかた）や野一色氏館（のいしき しやかた）など集落の中心に居館の痕跡がみられます。

近江地域の平地居館

米原市近江地域には、かつて大河ドラマで脚光を浴びた山内一豊（やまうちかずとよ）の妻の出身である若宮氏館（わかみや しやかた）が飯村（いむら）集落の中に構えられていました。このように村落内に方型の居館を構える構造が近江地域の特徴としてとらえられます。その最大のものが、Ⅳ－ⅲで紹介した箕浦城です。

福田寺（長沢）

■岩脇館（岩脇）

岩脇山のふところに「奥屋敷」の地名があり、今井・堀氏の一流岩脇氏の居館跡とされます。

■長沢城（長沢）

北国街道の要衝で長沢氏、慶増（きょうます）氏が守り、浅井段階では若宮、田那部（たなべ）両氏が在番をつとめました。集落中央に福田寺があります。

■宇賀野館（宇賀野）

館跡の小字「親方（おやかた）」は、御館の名残りと考えられています。近くに山内一豊の母・法秀院（ほうしゅういん）の墓があります。遠藤氏の館とされます。

※このほか、西円寺館（西円寺）（さいえんじやかた）などがあります。

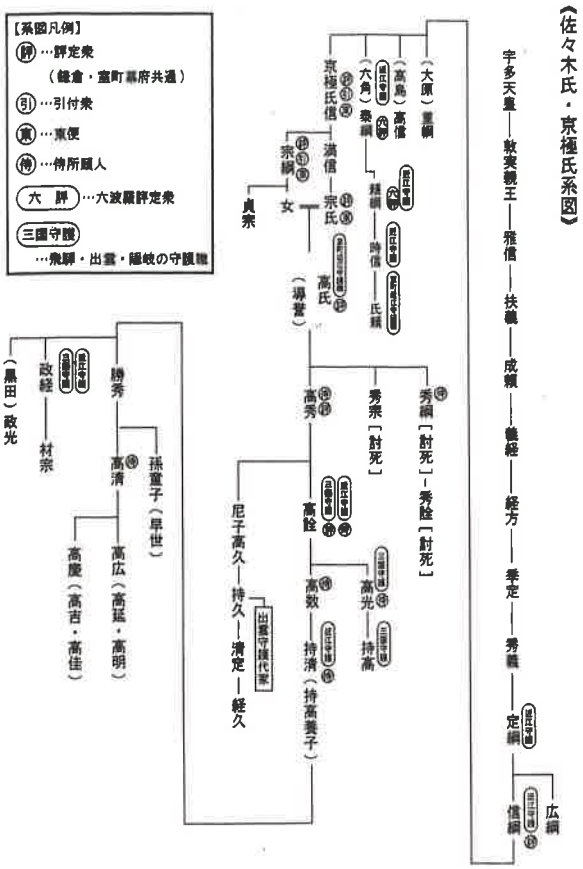
西円寺館跡（西円寺）

山内一豊母・法秀院の墓（宇賀野）

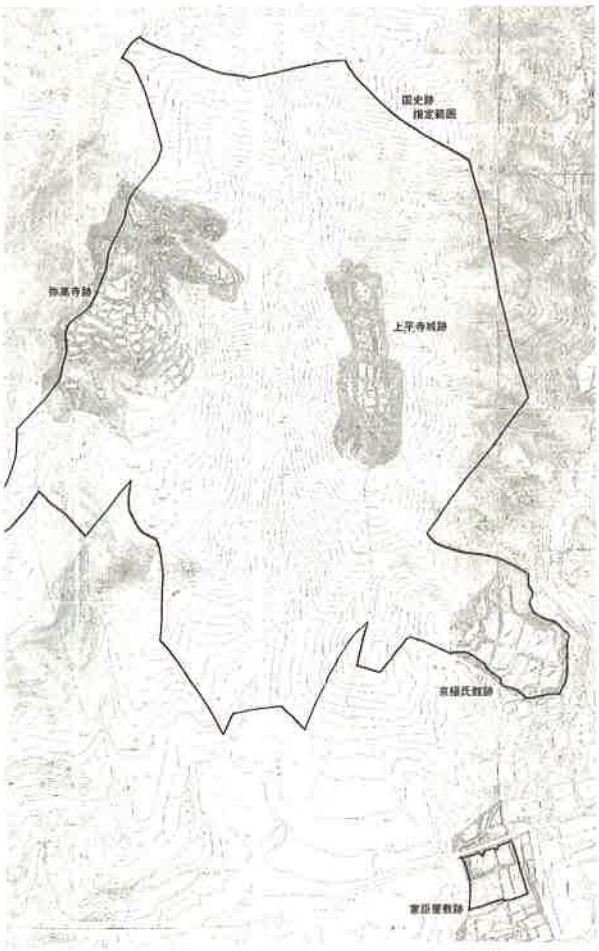
八日市場跡（箕浦）

若宮氏館跡（飯）

v　京極家の城と館　国史跡「京極氏遺跡　―京極氏城館跡・弥高寺跡―」



京極氏系図（作図：新谷和之）



京極氏遺跡位置図（枠線内は指定範囲）

■佐々木氏分流

近江の守護大名佐々木信綱には、重綱・高信・泰綱・氏信の四人の息子がいました。仁治２年(1241)、信綱の跡を継いだのは三男の泰綱で、小脇(東近江市)にあった佐々木氏の館と京都六角東洞院の館、愛知川以南六郡の地頭職を与えられ「六角氏」を名乗ります。四男氏信は、柏原荘の佐々木氏別邸と京都京極高辻の館を与えられ、「京極氏」を名乗り、大原・田中荘以外の愛知川以北六郡を領します。重綱は坂田郡大原荘、高信は高島郡田中荘(高島市)を領しました。

■京極家の内紛

南北朝期の京極道誉、応仁文明の乱での持清の活躍などで幕府内における地位を確立し、出雲国などの守護となった京極氏ですが、その後、持清と息子勝秀が相次いで亡くなると、出雲と隠岐の守護京極政経・材宗親子が、北近江に乱入し、これに重臣の多賀宗直・多賀高忠らの主導権争いが加わり、将軍家や隣国の六角・斎藤・朝倉らが介入して、北近江は乱れます。

■上平寺築城

永正２年(1505)の冬、ようやく日光寺で京極高清と材宗の間に和睦が成立します。上平寺の京極氏館は、混乱を収束させた高清が、北近江の安定と領民の平和を願って、それまでの柏原館を廃して、新たに築城した北近江の政治拠点です。『上平寺城絵図』(P17)には、いまの上平寺集落から寺林にかけて、武家屋敷や町人屋敷があったことが描かれています。これは、近江で最古の城下町でした。館内にのこる庭園跡は、京極氏が京都の文化を伊吹山麓に持ちこみ、花開いていたことを物語ります。

■大吉寺梅本坊公事

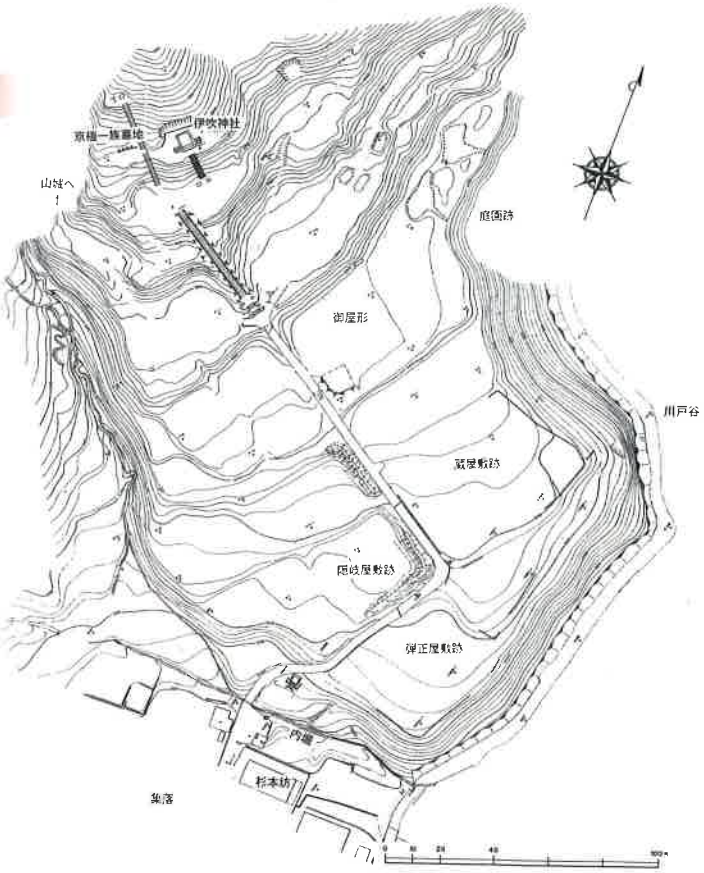
京極高清政権の確立には、上坂・井口・浅見などの北近江の有力家臣の力がありました。とくに上坂家信は発言力を強め、専横的な態度をとったため、家臣たちと対立を深めていきました。家信の跡を継いだ信光も同様で、家臣団の対立は、高清の息子高広・高吉の家督相続が絡み京極氏を巻き込んでいきます。大永３年(1523)、大吉寺(長浜市)の梅本坊という小寺院で公事(後継問題の訴訟)がおこなわれ、その結果に不満をもった家臣団は浅見貞則を盟主に国人一揆をおこし、上坂信光の居城今浜城(長浜市)を攻め落としました。さらに上平寺に寄せ、高清は高吉とともに尾張へ落ちます。北近江の拠点としての上平寺京極氏館の役割は終わりました。

国指定史跡

■京極氏館(上平寺)　標高350m

京極氏館跡庭園

礎石建物検出状況(御屋形)



京極氏館跡測量図

京極高清は、山岳寺院・上平寺を改修して守護居館を築きます。上平寺の伊吹神社境内全域が京極氏館跡で、庭園を伴った京極氏の屋敷(御屋形)、一族・重臣の隠岐屋敷や弾正屋敷(大津屋敷)、蔵屋敷といった建物が建ちならんでいたようです。庭園は、池泉観賞式庭園で、庭園を愛でながら宴や武家の儀式がおこなわれました。また、上平寺は京極高清の菩提寺で、絵図にも「御廟所」の記載があり、現在も一族の墓石があります。発掘調査では、庭園に近接して直径20～50cmの礎石が約30点出土し、束柱の礎石が良好にのこる縁のまわる建物と、これと並行する小規模な建物があったことを確認しました。礎石建物周辺で宴の盃や灯り取りとして使われた土師皿が大量に出土し、宴や儀式をおこなう会所的建物だったと考えられます。

国指定史跡

■上平寺城(弥高・藤川・上平寺)　標高669m

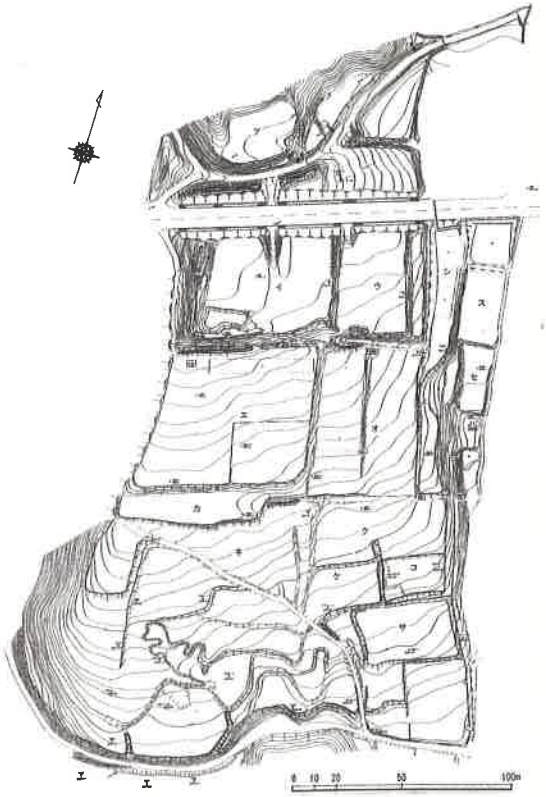
京極高清が上平寺に居館と城下を整備したのは、永く続いた京極氏の内紛に端を発したもので、居館の背後には、戦時に備えた「詰の城」の築城が必要でした。上平寺城はこのために築城されたものです。しかし、大永3年(1523)、国人一揆により守護居館の詰の城としての機能は終わり、浅井長政が北近江において主導権を握ると江濃国境の警護の城としての役割を担います。元亀元年(1570)、信長の近江侵攻では、城将の堀・樋口両名が織田に通じていたことから戦うことなく開城し、以後廃城となりました。上平寺城跡は、要所を堀切・竪堀・畝堀によって防御された連郭式の城郭で、土塁を屈曲させて虎口の防御を強化し、南端には11本の放射状の連続竪堀群をめぐらしています。直線の南北道路の左右に、小規模な曲輪が展開する構造から、中世前期の山岳寺院を城郭に改変したとの考えもあります。

「上平寺城絵図」(米原市蔵/ 市指定文化財)

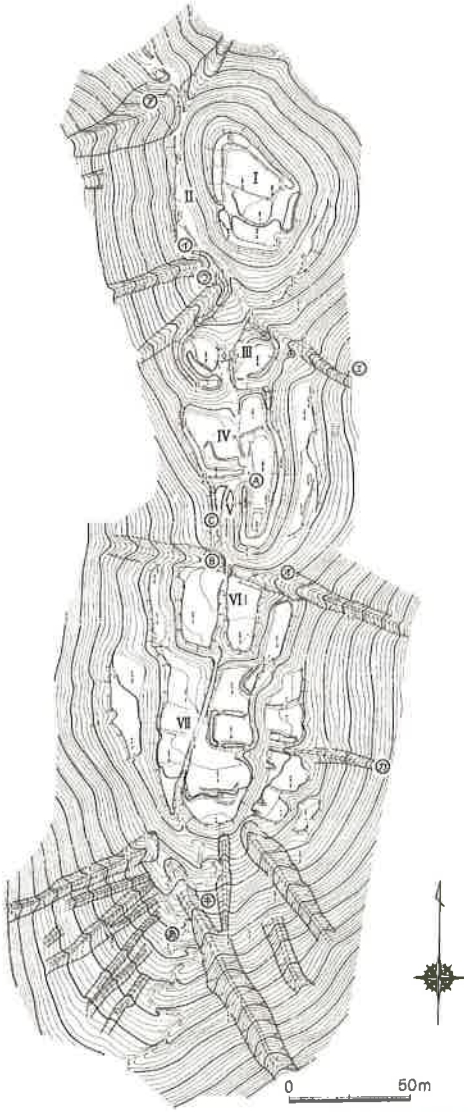
国指定史跡

■家臣屋敷と城下（上平寺・藤川）

京極氏館跡と城下は、東側を藤古川の深い谷、西側は家臣屋敷が並ぶ尾根と要害谷に守られ、南側を外堀で遮断するという「総構え」の構造です。城下の南端には、経済的にも軍事的にも重要な越前街道（北国脇往還）を取り込んでいます。家臣屋敷は小字「高殿」の尾根上にあり、三方を土塁で囲んだ方形の屋敷跡などが並びます。『絵図』には「若宮」「加州」「多賀」「浅見」「黒田」「西野」の北近江各地に拠点を置く六人の家臣の名前が記されています。発掘調査では、礎石や石組遺構、城下への西からの入口にあたる砂利敷きの堀底道、土塁が見つかっています。城下町の調査では、掘立柱建物、石組井戸、溝、火葬墓や京極氏時代の遺物が大量に出土しています。
（家臣屋敷のみ「国史跡」）



家臣屋敷跡測量図



上平寺城跡測量図

上平寺城下概念図

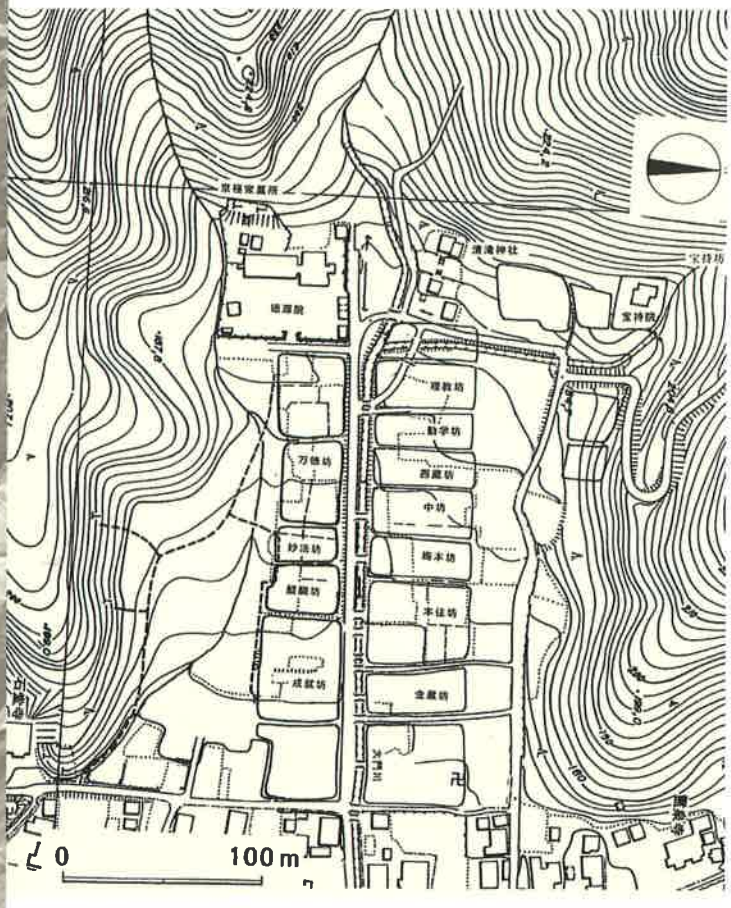
※このほか、京極氏城館に関わる城として、天清城（大清水）があります。

■柏原館と清滝寺徳源院(清滝)

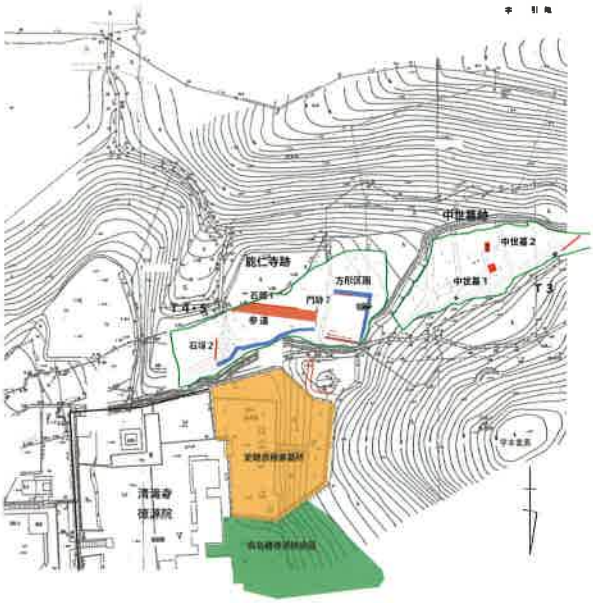
柏原庄の地頭柏原弥三郎は、悪行により佐々木氏に追討され、館は京極氏に引き継がれました。のちに清滝寺が建立されますが、京極道誉もしばしば逗留していることから、居館としての機能を備えていたと考えられます。在京御家人として京都を拠点としていたころの京極氏の居館はこの柏原館だったといわれます。

京極家の菩提寺・清滝寺は、初代氏信が創建したとされます。弘安9年(1286)の文書が残ることから、このころには存在していたのは確実です。応仁の乱以降、京極氏の内紛や浅井氏の勃興により衰退しますが、寛文12年(1672)、丸亀藩主京極高豊は、歴代墓地の修復や三重塔の建立、12坊を復活させるなど寺観を復興しました。

清滝寺境内図



清滝寺坊院復元図(作図:用田政晴)



七代京極高詮の菩提寺「能仁寺」

国指定史跡

■京極家墓所(徳源院)

京極高豊は、近隣に散在していた初代氏信から18代高吉まで(12代、14代欠)と、頼氏、経氏の18基の宝篋印塔を集め墓所の上段としました。下段には、京極家中興の19代高次の石製霊屋を中心に歴代丸亀藩主の墓所と、支藩多度津藩歴代の墓所などを配置しました。

近世大名墓は、国許に造営される場合と、国許と江戸の亡くなった場所で造営されることがほとんどで、京極家のように先祖の埋葬地である米原に葬るというのは極めてまれな事例です。さらに、鎌倉以来の先祖の墓も一堂に集めて一族の墓所とし、先祖の地を聖地化したというのは京極家墓所しかありません。米原は京極氏のふるさとです。

京極家墓所

vi　城塞化された山寺

国指定史跡

■弥高寺(弥高)　標高715m

弥高寺跡遠望(上平寺城跡から)

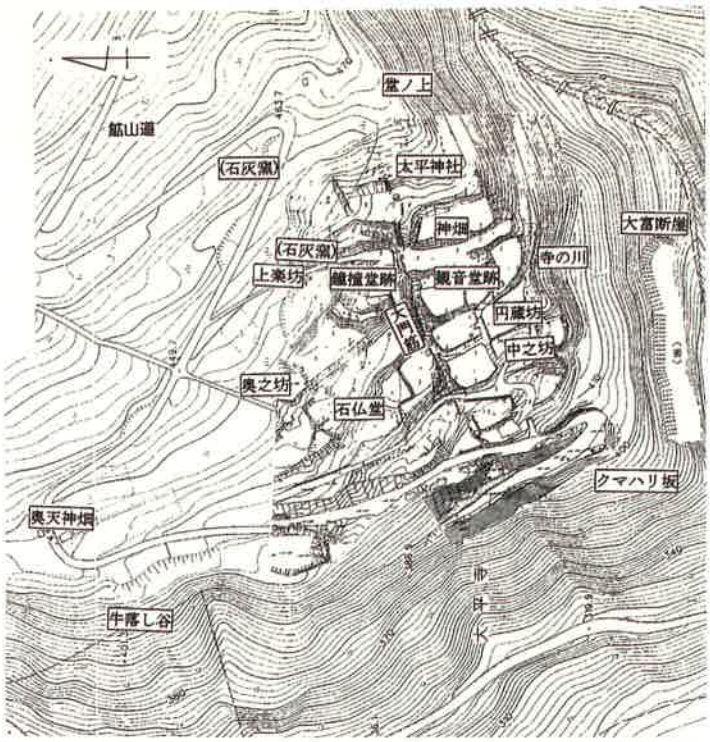
弥高寺大門跡

弥高寺跡測量図

役行者を開基とし、伝説的な山林修行者・三修が草創した伊吹山寺の系譜をひく近江最古の山岳寺院のひとつで、中世伊吹修験の中心的寺院でした。応仁の乱以降、京極家の内紛では山城として機能していたようで、明応4年(1495)に京極政高が「弥高寺より進み」、翌年には京極高清が弥高寺に「御陣」を構えていることが記録にみえます。戦国時代には京極氏館の背後にある当寺を城郭に改修し、元亀元年(1570)の信長の北近江侵攻でも、浅井・朝倉軍により、谷をはさんで向かい合う上平寺城とともに改修されたことが発掘調査で判明しました。城郭遺構としては、南前面に枡形虎口の大門と横堀による防御ラインを設け、本堂背後には、畝状竪堀群を持つ曲輪、さらに背後を巨大な堀切で区切っています。南西側面にも随所に竪堀を設けており、寺域の内部の改変を最低限に抑えながら縁辺部を厳重に防御しています。

■太平寺(太平寺)　標高450m

「去五月六日五宮所被成下、令旨称取詮、且抽御祈禱之丹誠、且可致合戦之忠勤云々間令参上太平寺、云城郭結構、(中略)武勇之若輩者馳、向馬場、致戦功之条」(『観音寺文書』)と記された文書は、五辻宮守良親王の令旨を受けた観音寺の僧が、鎌倉幕府調伏の祈禱と軍忠を誓って太平寺に城を構えて警護の任にあたり、若衆は番場に出兵したことに対する恩賞を求めたものです。五辻宮は亀山天皇の第五皇子で、鎌倉時代の末頃に伊吹山の太平寺に遁世していたようです。太平寺は、弥高寺とともに伊吹山四カ寺の主要寺院でした。南北朝時代の山城は人工的な施設で防御するものばかりではなく、急峻な山岳寺院を利用して、騎馬を主力とする鎌倉幕府の正規軍が登れないような山に立て籠もる行為そのものが「城」と呼ばれました。太平寺には堀切や土塁などの防御施設は認められませんが、南北朝時代の城のあり方を示す好事例です。

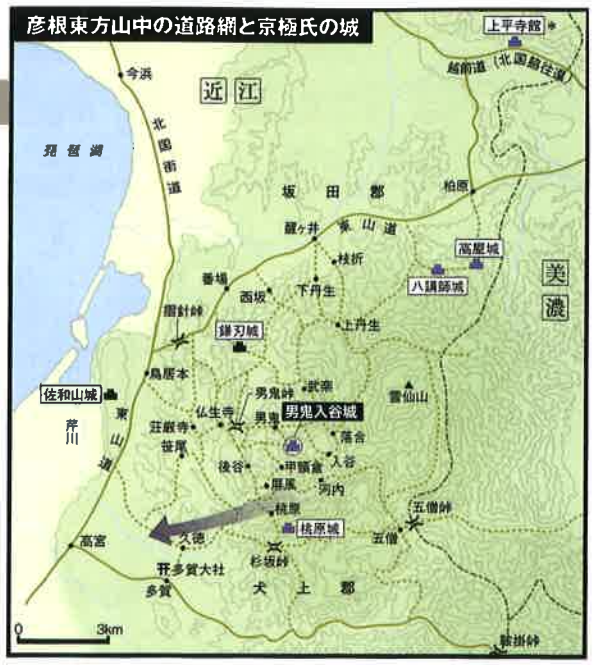


太平寺跡概要図

vii　霊仙山中の山城

京極高広の城　―中世京極氏最後の砦―

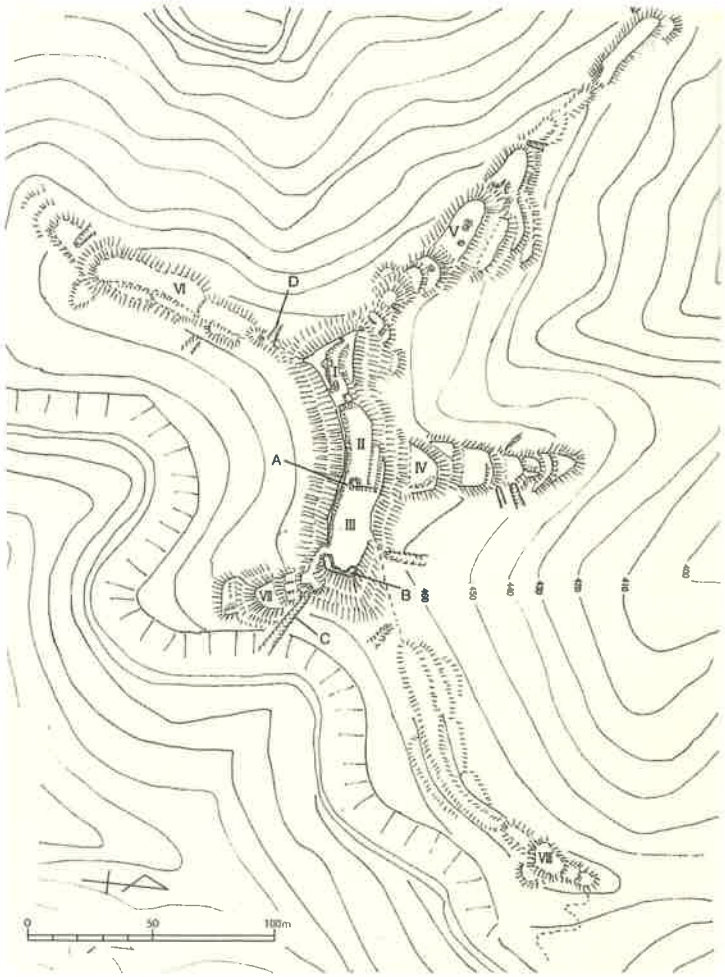
京極高広は、上平寺京極氏館を国人一揆で追われた京極高清の長男で、「郷野文書」に、「河内」の「御屋形様」と称されていることから、八講師城(河内)がその本拠と考えられます。弟高吉との家督争いを天文11年(1542)に和睦した高広は、台頭する浅井久政を攻めて臣従させ、天文19年から22年まで南近江の六角氏との抗争を続けます。このとき、高広軍の南下は常に霊仙山中を越えて、芹川に沿って平野部を攻める山越えルートでおこなっています。高広は、坂田郡の山間部、霊仙山麓で勢力を維持していたようで、男鬼入谷城(多賀町・彦根市)がその軍事拠点です。しかし、永禄3年(1560)、浅井長政が六角氏と断交した際に、六角氏とともに湖北へ侵攻しましたが、失敗し、北近江を追われます。



出典:「歴史群像」No.93

■八講師城(梓河内)　標高486m

河内には、京極氏の支城があり「小字猪の鼻に所在し、…京極氏の隠れ城」といわれます。さらに、集落から林道を山中に入ったところに八講師城があり、江戸時代の地誌には、多賀豊後守高忠や京極九郎高数など、北近江の守護京極氏や有力家臣の伝承が記されています。城の中心部は、方形を意識した三段の曲輪で構成されており、最も上位の西の曲輪が主郭です。東曲輪には、石垣による虎口がのこり、戦国末期に改修されたことがうかがえます。中心部から派生する尾根は5本ありますが、八講師城のすごいところは、この尾根すべてに曲輪を配置していることです。西尾根や南尾根では広く長大な曲輪が続き、かなりの土木量が投入されて大軍勢が駐屯したようです。このことから、八講師城は、中世京極氏最後の当主京極高広の拠点かもしれません。



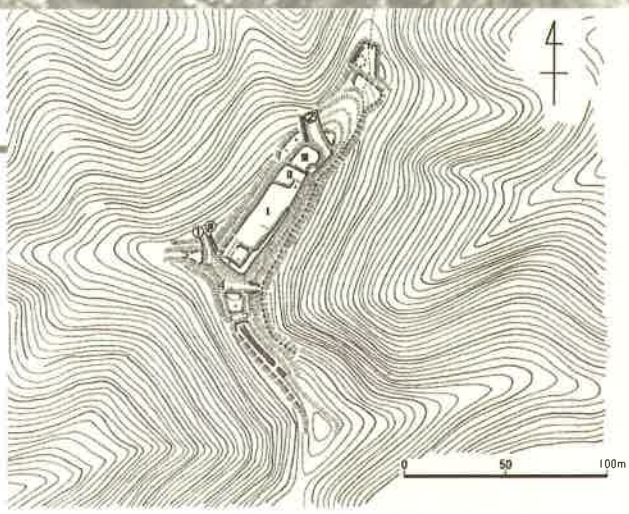
八講師城跡概要図(作図:石川浩治)

八講師城跡北曲輪切岸

※このほか、霊仙山中の城として、猪ヶ鼻城（河内）、高屋城（柏原）などがあります。

■枝折城（土肥城）（枝折）　標高263.8m

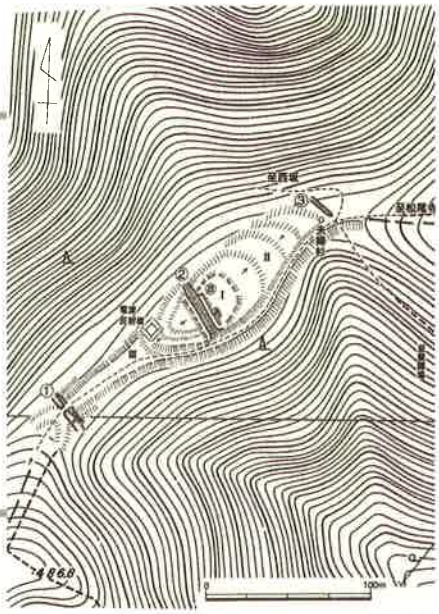
枝折城は「土肥の古城」とよばれます。土肥氏は、箕浦庄の地頭として赴任した鎌倉御家人で、番場、多和田、醒井に分家して、「箕浦庄の三土肥」と称しました。枝折城は、醒井殿と称した系統の詰の城と考えられます。尾根筋上に、ほぼ一直線に曲輪を配置し、城よりも高い南方には三本の堀切を構えています。主郭には南と東辺に土塁を巡らせ、南端の土塁は一段高くなって櫓台となります。主郭の北にも巨大な堀切を設けて山麓からの尾根筋を完全に遮断します。きわめてコンパクトな構造で、立地や規模、構造などから、典型的な在地土豪の詰の城です。



枝折城跡概要図（作図：中井　均）

■松尾寺山砦（上丹生）　標高480m

西坂からの松尾寺参詣道が尾根の稜線にさしかかったすぐ西側の尾根上に位置しています。３本の堀切を設けて尾根筋を遮断する構造で、中央の堀切がもっとも大規模で、上部の幅は約８ｍあります。この堀切の東側の削平地が比較的明瞭なことから、中心的な曲輪と考えられます。堀切側に土塁を設けていることから、西側に対する防御が意識されていることがわかります。ここから両端の堀切までは、自然の尾根筋です。峠道や尾根筋を防御する臨時的な築城と考えられます。



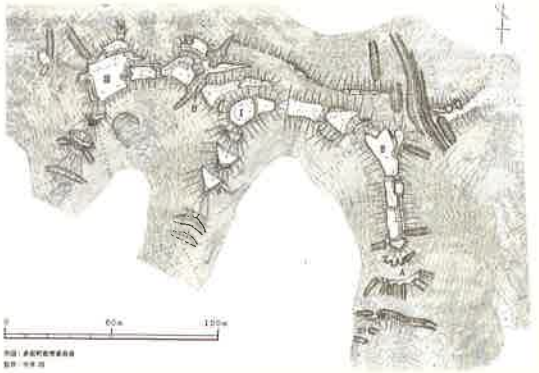
松尾寺山砦跡概要図（作図：中井　均）

■樋口西坂砦（樋口・西坂）　標高350m

最近、西坂集落背後の南東中腹で確認された小規模な城郭遺構です。尾根を登り切り、松尾寺山から北東へ長く醒井方面に伸びる尾根のピークに位置します。文献や伝承はありませんが、細尾根の背後を堀切で遮断して、尾根筋上に一直線に曲輪を配置しています。立地や規模は枝折城に似ていますが構造は単調です。在地土豪の詰の城と考えられますが、「坂田郡郷士在名牒」や「佐々木南北諸士帳」には樋口、西坂地域の記載はありません。

■男鬼入谷城（多賀町・彦根市）　標高685m

米原市の南に位置する彦根市鳥居本地域（旧坂田郡）は、霊仙山地深く、多賀町域にまたがって谷筋に小集落が点在しています。男鬼入谷城は、見渡す限り山しか見えない稜線山頂部にあり、主要街道の北国街道や東山道とは、西に約５㎞も離れた、まさに山中に孤立した立地です。城は尾根上のふたつの頂部と尾根筋を利用して築かれています。北側には三重堀切や、これに面して内側に石積を持つ土塁を設け、東側尾根には、喰い違いの竪堀を伴った櫓台や二段にわたる畝状竪堀群が構築されています。ほかにも、南に配した巨大な二重堀切や、石塁で築かれたトーチカ（特火点）的遺構とその直下の垂直の切岸とさらに二重堀切。多くは岩盤を削っていて、石塁とあわせて高い土木能力がうかがえ、戦国時代後半の山城の到達点と評価されています。八講師城を中世京極氏最後の本拠とするなら、男鬼入谷城は、他の勢力の軍事力が及ばない山間地に、軍事目的のみで築城された出撃拠点ととらえることができます。


男鬼入谷城跡概要図（多賀町教育委員会）

viii　続日本100名城・鎌刃城

日本全国には５万もの城跡があるなかで、財団法人日本城郭協会が「日本100名城」（2006年４月６日「城の日」）、「続日本100名城」（2017年）を選定しました。鎌刃城は続日本100名城のひとつで、滋賀県にはほかに、「100名城」に小谷城・彦根城・安土城・観音寺城、「続100名城」は玄蕃尾城(長浜市・福井県敦賀市)・八幡山城（近江八幡市）が選定されています。城のまち・まいばらの面目躍如というところでしょうか。

国指定史跡

■鎌刃城（番場）　標高384m

鎌刃城跡測量図

主郭石垣

出土遺物（貿易陶磁）

鎌刃城跡主郭

大石垣

西曲輪畝状竪堀群

■鎌刃城の歴史

『今井軍記』によると文明４年(1472)に今井秀遠が堀次郎左衛門尉の立て籠もる鎌刃城を攻めており、この頃にはすでに堀氏の城として機能していたことがわかります。天文７年(1538)、六角定頼が北近江に侵攻し鎌刃城や太尾山城・磯山城・佐和山城が落城し、六角氏の属城となります。『嶋記録』によると当時の鎌刃城主堀石見は京極高広方に属していたようで、坂田郡南部は六角氏と浅井氏の抗争に加え、守護京極氏政権も維持されている錯綜した地域だったようです。

元亀元年(1570)、信長の北近江侵攻で鎌刃城主堀秀村は織田方に付きます。信長は戦時下の北近江支配を堀氏に任せ、一説に坂田郡で６万石を領したといわれ、秀村の発給文書は浅井郡内の竹生島や菅浦にまでおよんでいます。鎌刃城は単なる境目の城というだけではなく、戦国武将堀氏の居城として北近江支配の拠点となりました。『当代記』によると、天正２年(1574)堀氏は突然改易され重臣樋口直房は甲賀で討ち取られました。前年の浅井氏滅亡により北近江が羽柴秀吉に与えられ、信長との間に軋轢が生じ、粛清にあったようです。このとき鎌刃城も廃されたようです。

主郭空撮(撮影:高木浩二)

主郭虎口

■鎌刃城跡の構造と発掘調査の成果

主郭と副郭を山頂に配し、主郭より北西に派生する尾根上に７ヶ所の曲輪を連ね、その先端は巨大な三重の堀切によって処理しています。また、副郭の西に派生する尾根上にも７ヶ所の曲輪を連ね、その先端は二重の堀切によって処理し、先端南西部には畝状竪堀群がめぐっています。副郭の南東は城域よりも高所に尾根が続くため８本の堀切を設けて尾根筋を遮断しています。この尾根は急峻にそそり立ち、そこはまさに鎌の刃を思わせます。

主郭の調査では南端から礎石建物が検出され、北側は広場となっていたようです。主郭周囲は石垣で築かれ、戦国時代にいち早く石垣を導入した先駆的な城郭であったことがわかりました。また、北辺中央部では枡形虎口とそれに伴う門の礎石、その前面には枡形への石段の城道が検出されました。北-Ⅴ郭では北辺中央部で枡形虎口が検出され、門の礎石から薬医門形式の城門が構えられていたようです。土塁が回る北-Ⅵ郭では、７間×７間以上の重層大型建物の礎石が検出され、半地下式構造の穴蔵をもつ天主の祖形となる大櫓と考えられます(P3)。遺物中最も大量に出土した鉄釘には様々な寸法があり、城内に数多くの建物が建てられていたことを物語ります。

北ーⅥ曲輪

北ーⅤ虎口

エピローグ　城を活かしたまちづくり

一般の村落に戦国時代の古文書がのこっていることはまれです。ところが、中世には村々に城が築かれ、いまもその痕跡を山中にのこしています。こうした城跡の分布状況や規模、構造などを分析することで、古文書では語られることがなかった地域の中世史が解き明かされるようになってきました。

第22回全国山城サミット米原大会（平成27年度）

しかし、市内の多くの城跡は、まだまだ山林に埋没した状態で眠っています。「続日本100名城」の鎌刃城ですら、約25年前は、地元でも位置さえ知られず、ましてや登ったという人はまれでした。平成３年の殿屋敷遺跡発掘を契機に、翌年「番場の歴史を知り明日を考える会」が組織され、学習会がもたれました。平成９年米原町史跡に指定。平成10年から５年間、地域住民をまきこんだ発掘調査を実施。歴史シンポジウムや虎口・水の手の整備などに取り組まれ、平成14年滋賀県史跡に指定。これをきっかけに始まった「近江中世城跡琵琶湖一周のろし駅伝」は、県内39城(平成29年度)が参加し、岐阜県や北陸、山陽地方にまでひろがり、里山に眠る山城を各地でクローズアップさせる大きな成果と交流の輪を広げています。鎌刃城は、またたくまに国史跡に指定されました（平成17年３月２日）。

鎌刃城まつり

６月第１日曜日（予定）
午前中は城郭専門家の案内による鎌刃城や番場周辺の山城の現地見学。午後は講演会がおこなわれます。

大櫓復元（河南中学校）

鎌刃城石垣団子

近江中世城跡琵琶湖一周のろし駅伝

11月23日（祝）琵琶湖をとりまく城跡から、戦国時代の通信手段である「のろし」が上げられます。各城跡では、趣向を凝らした催しもおこなわれます。　※写真は弥高寺(平成29年)

いくさ体験

上平寺よつ葉フレンズ

随　時
史跡京極氏城館群や北近江を探訪するときの昼食として、上平寺のおかあさんたちの「田舎料理バイキング」はいかがですか。
※団体のみ。要予約

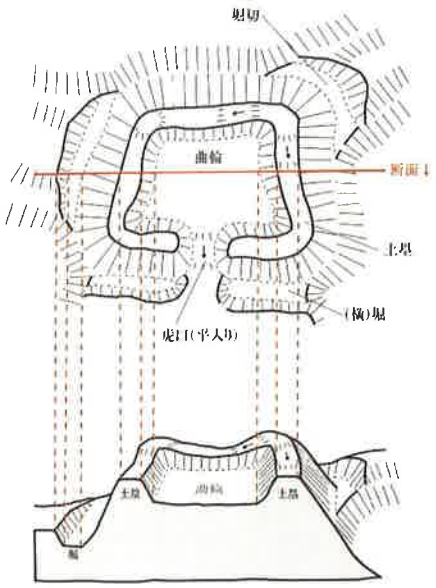
田舎料理バイキング

手作りお惣菜

V. 資　料

i　縄張図の見方・虎口の構造

■縄張図の見方

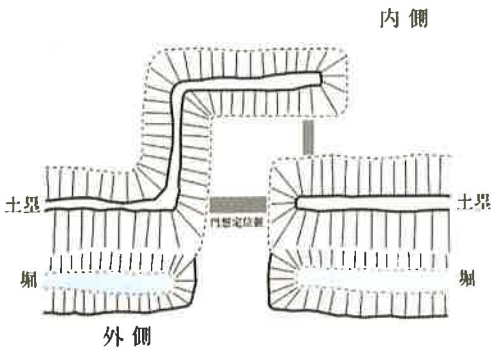


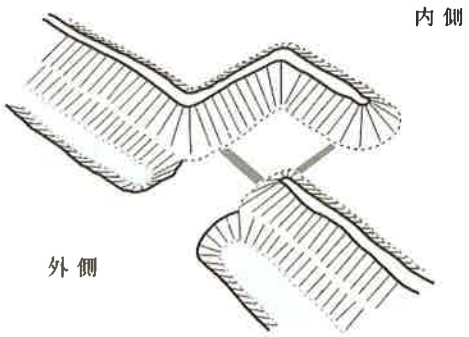
城跡を調査・見学するときに、便利かつ欠かせないものに「縄張図」があります。縄張図は、城跡の堀や土塁といった構造を平面的に表した図面です。

この縄張図の表し方で一般的なのは、「ケバ」による地形の傾斜面の表現です。城における防御の基本は、造成などによって地山を掘削・成形し、それによって得られた土地の高低差を利用して外部からの敵兵の侵入を阻止します。縄張図におけるケバは、この土地の高低差を示すもので、線の先がのびている方向へ向かって土地が傾斜していることを表します。このように、地形の改変により、意図的に傾斜を加えたところを「切岸」とよびます。一方、空白の範囲は平坦な地形を表現しており、通常は守備兵の存在する「曲輪（郭）」の範囲を示します。

基本的に戦国時代の山城の場合、地面の高低差や、その人工地形の複雑な組み合わせによって防御が固められているといえます。

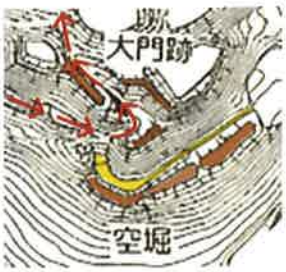
■虎口の構造



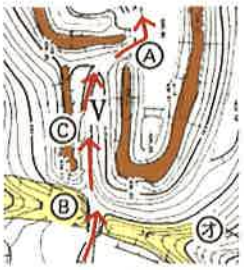


曲輪の出入口を「虎口」といいます。多くは曲輪周囲の堀や土塁を途切れさせ、外部との通路を設けた部分が該当します。曲輪が外部と直接つながることは、城の防御には不利な構造ですが、その弱点を克服するため、堀・土塁の組み合わせによって、さまざまな虎口が発達していきました。

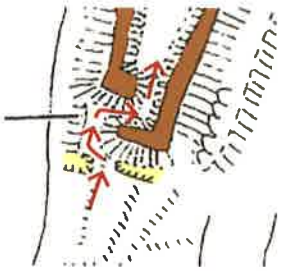
上図は、一般的な「枡形虎口」の模式図です。枡形虎口は、曲輪の内外をつなぐ部分に土塁・門などによって「枡」のような小空間を設け、敵兵の侵入への防御性を高めた虎口です。



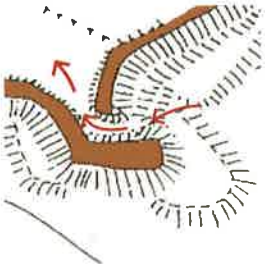
弥高寺大門（虎口）



上平寺城虎口



長比城西城虎口



長比城東城虎口

※このページは『甲賀戦国の城を歩く』（甲賀市史第７巻『甲賀の城』付録ブックレット）を参考にしました。（作図：福永清治）

ii　米原市内主要城館跡位置図

太平寺
弥高寺
上平寺城
京極氏館
家臣屋敷
伊吹山文化資料館
大原氏跡
天清城
大峰山城
不破郡
関ヶ原町
須川山砦
長比城
徳源院
柏原館
柏原宿歴史館
醒井宿資料館
高屋城
八講師城
猪ヶ鼻城
枝折城
大垣市
多賀町
1:25,000

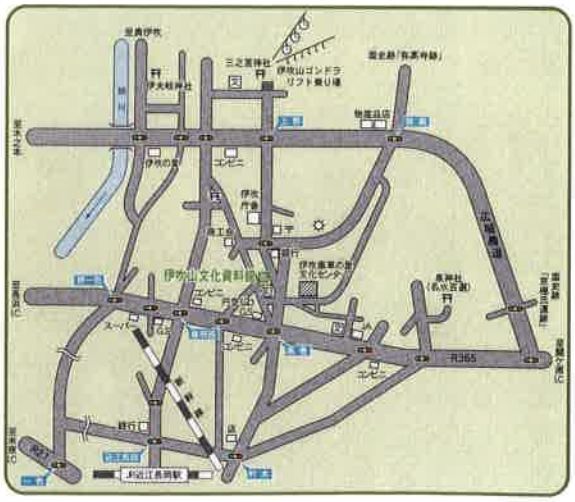
iii　城の展示施設紹介

■米原市伊吹山文化資料館

じつは「お城の博物館」だった―

「近江の城の博物館」というパンフレット（滋賀県ミュージアム活性化推進委員会発行）があります。このなかに、伊吹山文化資料館は、県立安土城考古博物館などとならんで紹介されています。館内には、京極氏館、上平寺城、長比城、太尾山城や城塞化された弥高寺の地形模型（S＝１／600）のほか、県内の山城の分布模型があります。考古学の展示は、実際に出土したものや写真で構成されますが、より深く遺跡を理解するのに有効なのが模型です。山中にある山城跡へは、だれもが行けるわけではありません。山の中の遺跡は、木々に覆われていて、現地で全体像を把握するのは至難のわざです。資料館には京極氏館や弥高寺の出土品も展示されています。出土品が織りなす時間の流れを縦軸に、模型が展開する空間的広がりを横軸にして歴史の舞台に触れる。そして、実際に訪ねてみる。そんな橋渡しができればと思います。

所在地／米原市春照77番地
電話・ファックス／0749-58-0252
開館時間／午前９時～午後５時（入館は４時30分まで）
休館日／毎週月曜日（祝日の場合は開館）
　　祝日の翌日（日曜日、土曜日と重なる場合は開館）
　　12月27日～１月５日
観覧料／一般200円（20名以上団体160円）
　　中学生以下100円（同上80円）
ホームページ／http://www.zb.ztv.ne.jp/mt.ibuki-m/



上平寺城跡地形模型

街道の資料館

米原市柏原宿歴史館
所在地／米原市柏原210番地
電話・ファックス／0749-57-8020
開館時間／午前９時～午後５時
休館日／毎週月曜日、祝日の翌日
　　年末年始
観覧料／一般300円
　　中学生以下100円
※20名以上団体割引あり

米原市醒井宿資料館
所在地／米原市醒井592番地
電話・ファックス／0749-54-2163
開館時間／午前９時～午後５時
休館日／毎週月曜日、祝日の翌日
　　年末年始
観覧料／一般200円
　　中学生以下100円
※20名以上団体割引あり

iv　参考文献

■主要参考文献一覧

伊吹町教育委員会編2003『京極氏の城・まち・寺』サンライズ出版
魚津市教育委員会2012『自慢のお城　松倉城とその支城群』
甲賀市2010『甲賀市史　第７巻　甲賀の城』
滋賀県教育委員会1989『滋賀県中世城郭分布調査報告書六（旧坂田郡の城）』
城郭談話会編2014『図解　近畿の城郭Ⅰ』戎光祥出版
城郭談話会編2015『図解　近畿の城郭Ⅱ』戎光祥出版
城郭談話会編2016『図解　近畿の城郭Ⅲ』戎光祥出版
城郭談話会編2017『図解　近畿の城郭Ⅳ』戎光祥出版
中井　均2006『米原町内中世城館跡分布調査報告書』米原市教育委員会
中井　均編2006『近江の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版
米原市教育委員会編2006『戦国の山城・近江鎌刃城』サンライズ出版
米原市教育委員会2011『京極家激闘譜　―京極氏の遺跡、信仰、文化―』
米原市教育委員会2017『霊仙山　―「江陽四高山ノ其ノ一ツナリ」―』
用田政晴2009『湖と山をめぐる考古学』サンライズ出版

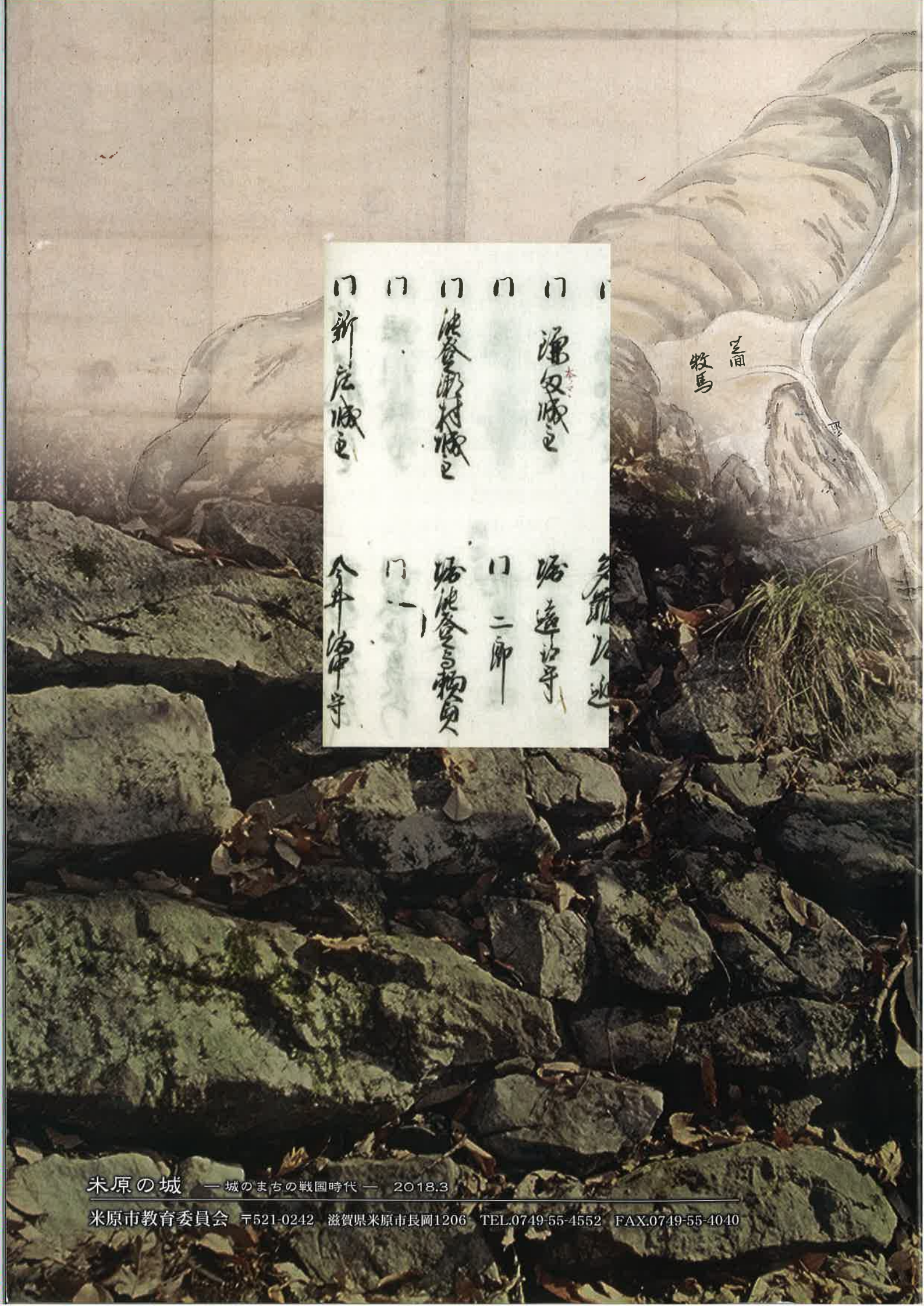
米原市山城キャラ
「かまはじい」

米原市山城キャラ
「まい姫」

■米原市の城関連文献

滋賀県立安土城考古博物館1996『元亀争乱　―信長を迎え討った近江―』
稲葉隆宣2000『上平寺南館遺跡』滋賀県教育委員会
内田保之・日紫喜勝重2003『上平寺遺跡・寺林遺跡』滋賀県教育委員会
太田浩司2000「戦国期の京極家臣団」『上平寺城跡分布調査概要報告書』伊吹町教育委員会
小島道裕1997「上平寺城下について－地名と絵図－」『城と城下』新人物往来社
髙橋順之1998『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ　上平寺館跡』伊吹町教育委員会
髙橋順之2000『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅱ　高殿地区』伊吹町教育委員会
髙橋順之2002『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ　上平寺城跡』伊吹町教育委員会
髙橋順之2001『上平寺遺跡・寺林遺跡』伊吹町教育委員会
髙橋順之2002『推定若宮氏・浅見氏屋敷跡発掘調査報告書』伊吹町教育委員会
髙橋順之2004『上平寺遺跡Ⅱ』伊吹町教育委員会
髙橋順之2005『国指定史跡京極氏遺跡分布調査報告書―京極氏城館跡・弥高寺跡―』伊吹町教育委員会
髙橋順之2012『国指定史跡京極氏遺跡発掘調査報告書』米原市教育委員会
髙橋順之2014「近江の上平寺城から小谷城へ」『中世城館の考古学』高志書院
中井　均・髙橋順之1994「上平寺城とその城下－遺構と絵図からの再検討－」『近江地方史研究』29.30
中井　均1997『近江の城　―城が語る湖国の戦国史―』サンライズ出版
中井　均1998「戦国期城館の庭園」『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ』伊吹町教育委員会
中井　均「伊吹山の山城」『伊吹山を知るやさしい山とひと学の本』伊吹山ﾈｲﾁｬｰﾈｯﾄﾜｰｸ
米原市教育委員会編2009『新視点・山寺から山城へ―近江の戦国時代―』
宮崎辰之2013「室町・戦国期京極氏の江北支配」大阪市立大学修士論文
宮島敬一1988「京極氏奉行人連署奉書について」『戦国史研究』
宮島敬一1996『戦国期社会の形成と展開』吉川弘文館
山嵜仁生2004『弥高のあゆみ　彌高物語』弥高区
山嵜仁生2007『蘇る歴史の弥高山』サンライズ出版
用田政晴1986『弥高寺跡調査概要』伊吹町教育委員会

米原市山城キャラ
「やまじろー」



米原の城　— 城のまちの戦国時代 —　2018.3

米原市教育委員会　〒521-0242　滋賀県米原市長岡1206　TEL.0749-55-4552　FAX.0749-55-4040